

328

378



始



21263

328-378



御

衆

集

第十二卷

大正
6. 3. 27
購永

例言

本編には仁孝孝明明治三帝の御製を謹輯し奉り、これに添へまつるに昭憲皇太后の御歌を以てせり。

仁孝天皇御製は、天皇のいまだ東宮におはせる文化十二年より崩御の前年なる弘化二年にいたる、三十餘年間(但天保二年より同十四年にいたる十三年間の御製を闕く)にわたりて詠ませたまへる御製約七百首を收む。然してその御製中、圖書寮所藏の柳營御賀和歌に載せたるものを除くのはかは、悉く帝國圖書館所藏の内裏和歌御會中に見えたるものなり。

孝明天皇御製は、天皇即位の翌年なる嘉永元年(弘化五年)より崩御の御年なる慶應二年にいたる、十九年間の御製千三百餘首を收む。然してそのうちの百三十六首は、孝明天皇紀に見えたるものにして、他は悉く圖書寮所藏の公宴御會和歌中に載せたるものなり。

明治天皇御製昭憲皇太后御歌、いづれも世にもれ聞えたるかぎりを謹輯し、そ

例言

の謬り傳へたるを正して、爰に御製五百七十一首御歌二百十八首を收めまつれり。

大正六年三月

古谷知新謹識

御製集第十二卷目錄

仁孝天皇御製.....	一一三
文化十二年御製.....	一
文化十三年御製.....	二
文化十四年御製.....	三
文化十五年(文政元年)御製.....	五
文政二年御製.....	一一
文政三年御製.....	一六
文政四年御製.....	二二
文政五年御製.....	二九
文政六年御製.....	三六
文政七年御製.....	四二
文政八年御製.....	四九

御製集第十二卷目錄

御製集第十二卷 目錄

二

文政九年御製……………一六
 文政十年御製……………一七
 文政十一年御製……………一八
 文政十二年御製……………一九
 文政十三年(天保元年)御製……………二〇
 天保三年御製……………二一
 天保十五年(弘化元年)御製……………二二
 弘化二年御製……………二三
 孝明天皇御製……………二四—二五
 弘化五年(嘉永元年)御製……………二六
 嘉永二年御製……………二七
 嘉永三年御製……………二八
 嘉永四年御製……………二九
 嘉永五年御製……………三〇
 嘉永六年御製……………三一

嘉永七年(安政元年)御製……………三二
 安政二年御製……………三三
 中殿小御所障子の色紙和歌の御製……………三四
 安政三年御製……………三五
 安政四年御製……………三六
 安政五年御製……………三七
 安政六年御製……………三八
 安政七年(萬延元年)御製……………三九
 萬延二年(文久元年)御製……………四〇
 文久二年御製……………四一
 文久三年御製……………四二
 文久四年(元治元年)御製……………四三
 詠五十首和歌……………四四
 元治二年(慶應元年)御製……………四五
 慶應二年御製……………四六

御製集第十二卷 目錄

三

明治天皇御製……………三〇五—三六二

新年和歌御會始御製……………三〇五

四季御製……………三三三

雜御製……………三三九

昭憲皇太后御歌……………三八三—四二〇

新年和歌御會始御歌……………三三三

四季御歌……………三三九

雜御歌……………三三九

十二徳の御歌……………四二七

今様御歌二首……………四二九

御製集第十二巻 目録終

御製集第十二巻



仁孝天皇御製

文化十二年

春江霞 正月二十四日内裡御會始在東宮坊

難波江のみぎはのこほり解けそめて春なる波の霞むのどけさ

七夕河七夕御會

彦星の待ちえし今日のちぎりより逢瀬をいそぐ天のかはなみ

仁孝天皇御製

文化十三年

山水告春 正月二十四日内裡御會始在東宮坊

のどけしな大内やまの雪きえて御池のこほりときつはるかせ
七月七日七夕御會

めぐりきて契うれしき彥星の行合のそらは今日にぞありける

文化十四年

松添榮色 五月二十四日御代始御會

言の葉の世世のさかえに松が枝もなほいろまされ九重のには
立 春 六月二十四日

あらたまの春たつ今日は九重の山のみゆきもまだき解くらし

鶴同

幾千代とちぎれる松のしたかげに馴れて久しき鶴の毛ごろも

朝 霞 同月二十五日聖廟御法樂

佐保姫の霞のころも今朝よりは春きにけりとにほふのどけさ
七夕契秋七夕御會

天のがは今日の契にいくちぢの秋をぞかくるほしあひの空

花 薄 七月二十四日

秋かせの吹けばみだるる花薄ひろき野もせに誰れまねくらむ

鹿 聲 同

妻戀をしのびかねつつ音にたつる小倉のやまの秋のさをしか

池 水 同

あきの夜の空すむ月の影きよくやどるも飽かぬ庭のいけみづ

秋 田 八月二十四日

秋いくよたのみに賤が植ゑおきし千町の稻葉いまぞいろづく

仁孝天皇御製

逢 戀八月二十四日

なげきつつ過ぎし月日はゆめかさて今宵うつつかはす手枕

寄菊祝重陽御會

九重に千代もへぬべきしら菊は秋をちぎりて咲きまさるらし

紅葉深 九月二十四日

から錦やまとはあらぬ色ふかく染むる立田の秋のみぢ葉

互契戀同

いつまでもおもふ思のかはらじとかたみに契る中はたのもし

巖上苔同

年ふりし庭のいはほのうごきなく苔もみどりの色をかさねて

時 雨十月二十四日

晴るるかと思ればしぐるる立田山のこる紅葉の色まされとや

戀同

かくばかりよそなる中と知りながら猶したはるる思わりなき

殘 雁十一月二十四日

こころより秋におくれて來る雁のこゑさへさむき冬の山かせ

庭 雪同

木木の色もわかぬばかりに白雪の降りつむ庭は人もかよはず

眺 望同

海原や浪路はるかに見わたせば眞帆片帆ゆくおきのももぶね

鷹 狩十二月二十四日

いやふかき雪もいとはで鷹人の今日も片野に狩りくらすらし

文化十五年 (文政元年)

貴賤迎春 正月二十四日御會始

しづの女が摘むや雪間の若菜にも雲居へだてぬ春は知られて

仁孝天皇御製

立 春二月十一日

うちはへて春くる今朝は吹くかせの池の水をまだき解くらし

河 霞 同月二十二日水無瀬宮御法樂

水無瀬河ゆくせの水も今朝はまづ春をしらせて霞むのどけさ

神 祇同

松の葉のよよにさかゆる住吉の神のめぐみはすゑもたえせじ

霞 同月二十四日

このあさけ舟こぎ出づる浦の波しほ路はるかに霞むのどけさ

逢 戀同

うき月日過ぎし思のつれなさも忘れてこよひかはす手まくら

早春梅 同月二十五日聖廟御法樂

のどけしないうづこ隔てぬ春風にこのかみがきの梅ぞにほへる

花映日 同月二十八日

ひさかたの天の戸いづる朝日影こすゑの花のいろを添ふらし

桃 花 三月二十四日

ひさかたの空もひとつにくれなるの色にうつろふ桃のはな園

歎 冬同

をしめども暮れゆく春の河水にかけぞながるる岸のやまぶき

春 戀同

おぼろげにかすめる春の月よりも夜半の思のはれまなくして

祝 四月八日

むかしいま榮ゆる道はしきしまの大和もろびといはふ言の葉

始聞郭公 同月二十八日

待つゆふべそれかとばかり時鳥まださと馴れぬ初音をぞきく

瞿麥露 同

しめゆひし庭のまがきの床夏はあさなあさなの露にいろ添ふ

仁孝天皇御製

夏 草 五月二十四日

夏もはやいつしかふかくなりぬとや籬にしげる露のくさむら

螢同

月はまだ木の間に見えぬゆふぐれに影すすしくも螢とびかふ

旅 友同

都をばいでにし日より行きつれてかたらふ旅の友ぞしたしき

夏 藻 同月二十五日

夏の日の暮るる川瀬のなみかせに底の玉藻のなびくすすしさ

蚊遣火 六月二十四日

さらでだにいぶせき夏の賤が屋に煙たてつつ蚊やりをぞたく

山 家 六月二十四日

世をはなれ静にすめるならひとて人もとひこぬおく山のいほ

籬瞿麥 同月二十五日聖廟御法樂

おく露もいろにぞうつる夏草のしげるまがきのなでしこの花

七夕喜晴 七夕御會

雲霧は初あきかせに晴れて今日ちぎりうれしく星や逢ふらむ

女郎花 七月二十四日

をみなへし咲ける野原にかりねして契わすれぬ露の手まくら

秋 風

今朝ははや庭の萩はらそよぎつつ袂すすしきあきかせぞ吹く

寄絲戀 同

うきなかにかけてもあはぬ片絲を玉の緒にとはなど思ひけむ

江 月 八月二十四日

秋ふかく末葉みだるる村あしのつゆの玉江にすめるつきかけ

月前鴈 同

雲もなし月すめる夜の天のとに聲をほにあげて渡るかりがね

仁孝天皇御製

河霧 八月二十八日

大井河くだすいかだも見えわかず秋霧ふかきなみのゆふぐれ

菊花久馥重陽御會

ふりせじなこのがさねに匂へるもなほながづきの白菊の花

秋時雨 九月二十四日

さらでだに秋のゆふべは物うきに淋しさそへて時雨ふるなり

紅葉同

露にそめ霜にぬれつつもみぢ葉の色ふかくなる秋のこのごろ

海邊朝同

おきつ風あさざり晴るる浪の上にあらはれ出づる浦のはつ鳥

氷 十月二十四日

冬きぬと嵐さえゆくあと見えて池のみぎはにこほりゐにけり

寄名所戀同

いつまでかあはでの杜の夕時雨そでのみぬれて年の經ぬらむ

すみがま 十二月二十八日

雪の色も霞むと見しは小野山にやく炭がまのけぶりなりけり

たけ同

九重に千代よろづ代を契りつつうてなの竹のいやさかふかげ

文政二年

寄世祝言 五月二日御會始

四方の海をさまる世とて國つ民にぎはひうたふ聲もゆたけし

早春霞 同月八日

春あさみみざりに降れる白雪はまだ消えなくに霞むやまの端

郭 公 同月二十一日

あしびきのやま時鳥をちかへり絶えずかたらふ五月雨のそら

仁孝天皇御製

若 菜五月二十二日水無瀬宮御法樂

消えあへぬ雪間をわけて萌え出づる野邊の若菜を摘むものどけし

初 春同月二十四日

朝日かげにほへる山のかすむこそ雪げもよほす春は立つらめ

田 家同

賤がすむ門田のさなへ夏たけて露ふきちらすかせのすすしさ

霞同月二十五日聖廟御法樂

一夜松はるにあけゆくこの朝明この神がきのかすむのどけさ

夕立雲六月二十四日

風はやみ一村きほふゆふだちの雲にきこゆるなるかみのおと

松下水同

あつさをもわすれて掬ぶ山かげの松のしたゆく水ぞすすしき

後朝戀同

きぬぎぬの名残つきせで俤のかへるあしたも身に添ふはうし

夏 野同月二十五日聖廟御法樂

梓弓いる野のすすき茂りあひて行くかたたどる夏のこのごろ

七夕草花七夕御會

星や猶あかすめづらむ折にあひて今日さきそめし花の千種を

水邊萩七月二十四日

かげうつる岸のあきはぎ咲くころは錦をさらす池のささなみ

月契秋同

かぎりなき契は千とせひさかたの雲居のあきにすめる月かげ

月前雲八月十六日

消えやらでたなびく宵の浮雲をはらひつくせよ月のしたかせ

秋夕露同月二十四日

秋といへば吹く風さへもさびしきにあはれ添へたる夕暮の露

仁孝天皇御製

水上月八月二十四日

ひさかたの空すむ月のかげ見えて秋はさやけき庭のいけみづ
風前雁同

このあさけ聞くもめづらし秋風にさそはれわたる初雁のこゑ

月照菊重陽御會

すみわたる月のひかりにみがかれて露もくもらずにほふ白菊

露添紅葉九月二十四日

染めつくす木木の紅葉のいろをまた猶いくしほに添ふる夕露

寄玉戀同

袖にちるなみだの玉の敷そひて逢ふことかたき夜な夜なの床

松上霞同月三十日

この朝け春たつらしも常磐なるまつのみどりの霞むひとしほ

十月見紅葉十月二十四日

神無月しぐれしぐれてもみぢ葉の秋にもまさる千入をぞ見る

殘菊留秋同

おく霜にかれても菊のにほふこそ秋のなごりを猶のこしけれ

浦松風同

すみよしや浦わの松の風のこゑも幾千代よばふ神のめぐみに

神 樂十一月二十四日

おもしろく神ぞ聞くらしとりどりに吹く笛たけやうたふ榊葉

初逢戀同

おもひわび結ばほれしもひきかへてとけそめにける中の下紐

河同

まもります神の惠の五十鈴川ながれのすゑは世世に絶えせし

鷹 狩十二月二十四日

降る雪の寒さも知らじ狩人のとだちの野邊にいさむこころは

仁孝天皇御製

埋 火十二月二十四日

よりそへばやがて寒さも忘られてたちさがたき埋火のもと

戀 衣同

思ひあまり夜の衣をかへしてもうらみばかりの夢ぞつれなき

千 鳥同月二十五日

あら磯の浪のさわぎのむら千鳥いづこの浦に鳴きわたるらむ

文政三年

江上春望 正月二十四日御會始

またたぐひなみものどかに霞みつつ梅が香にほふ難波江の春

早 春二月四日

浅みどりかすみの衣たちそめてまだき春しるあさとでのそら

初春風 同月二十五日聖廟御法樂

昨日みし雪げの雲を吹きすてて今朝はのどけき春のはつかせ

霞 同月二十八日

雪のこる深山のおくも霞みけり春のいたらぬかたはあらしな

忍 戀同

いかがせむ浮名たてじと忍ぶれどおもひの涙よそに見えなば

旅 同

さかりなる旅路の花をわけゆくに猶わすられぬふるさとの春

柳帶露 三月二十二日水無瀬宮御法樂

おくつゆの玉の緒なれやゆるく吹く風によらるる青柳のいと

藤 同月二十四日

池岸のいは根に匂ふふちなみやいくよの春をかけて咲くらむ

蛙 同

ながれゆく春の日かすを河みづにせきとめて鳴く蛙なるらし

仁孝天皇御製

舟三月二十四日

見るがうちに行方も遠くなるみ潟なみ路をわくる沖のとも船

簷新樹四月二十八日

花になれし梅も櫻も茂りあひて軒端の樹樹ぞおもがはりせる

見月同

名にしおふ秋のもなかも今宵ぞと見るに限なく澄める月かげ

寄鳥戀同

待つ人はこの夜ふけゆく楨の戸をうしや水鶏の何たたくらむ

鶯五月四日

あらたまの年のはじめに告げそめて千代のはる知る鶯のこゑ

夏月同月二十四日

とき知らぬ霜もおくかと夏の月まさごにすめる影のすすしさ

夏花同

五月雨にうちそほちつつ咲きおもる外面の栲いろふかく見ゆ

夏蟲同

夜な夜なに影も亂れて飛ぶ螢なにのおもひや身をこがすらむ

夕立六月二十四日

はげしくもきほふと見てし夕立のはや遠方になるかみのおと

鷹狩同

ふぶきちる片野のみのを狩りくらし歸るたもとに冴ゆる山風

漁村同

漕ぎかへる舟のゆくへを見わたせば里ひとむらの海士の家家

曉螢同月二十五日聖廟御法樂

ともし火はうすくなりゆくありあけの窓をてらして螢とぶ影

星河秋興七夕御會

天の河ふなですすしく雲はれて月もさやけきほしあひのそら

竹 露 七月二十四日

秋かせのはらふあとより置きあまる臺の竹のつゆのさやけさ

聞 鹿 同

松風の吹くにたぐへてきこゆなり秋の深山のさをしかのこゑ

秋 戀 同

わりなしや人のこころの秋の風ふきそめておく袖のしらつゆ

秋 霧 八月二十四日

百草の籬のにしきあやなくもたちへだてたる今朝のあさざり

松風入琴 同

かきならす母屋の小琴の音をそへてえならずかよふ軒の松風

寄草戀 同

人は忘れ我はしのぶの草の名に戀ひつつ年をふるぞつれなき

松 葛 八月二十八日

やま松のしげるみどりも染めかかる葛の紅葉に秋をわくかけ

對菊契久重陽御會

契りつつ猶みはやさむ千千の秋も老せぬ菊の今日のさかりを

十三夜月 九月十三日

九月やさやけき影も今宵こそ名におふ夜半となほみがくらめ

月前紅葉 九月二十四日

よるもなほ月の光のてらすより色をみぎりの木木のもみぢ葉

瀧邊紅葉 同

幾千筋よりませておとす瀧の糸を錦に染むるもみぢ葉のかけ

紅葉交松 同

枝かはすきしの紅葉のいくしほに松のときはも秋をわくらし

時雨晴陰 十月二十四日

浮雲の立ちまよひつつ村時雨ふるかと思れば晴るる日のかげ

野寒草十月二十四日

秋に見し千種の花のかけもなく霜がれわたる野邊のさびしさ

網代同

篝火のかけふくる夜も網代守なほ寐ねやらす氷魚や待つらむ

草花露同月二十六日

あき霧の晴るるまがきの朝ぼらけ露にいろそふ花のももくさ

夜 衾十一月二十四日

うづみ火は消ゆともよしや重ねつつ冬をわするるさ夜の小衾

雪同

降りつもる外山はるかに見わたすも都へだてぬ今朝のしら雪

旅行同

ゆくするのひなの長路を思ふよりいや遠ざかるふるさとの空

竹 雪十二月二十四日

したをれのこゑも寒けし窓の竹よふかく雪や降りおもるらむ

増 戀十二月二十四日

逢ふにそひ逢はぬに増る思かな戀てふものはわりなかりけり

名所鶴同

幾千代もしきかさぬらしむしろ田にむれつつあそぶ鶴の毛衣

江春曙十二月二十五日

堀江こぐたななし小舟たちかすみ行方いさよふ春のあけぼの

文政四年

鶯爲春友正月二十四日御會始

言の葉の友とぞなるるうぐひすは聲の千年のはるを告げつつ

霞同月二十六日

漕ぎ出づる舟ものどかにわたの原八十嶋かけてかすむ朝なぎ

仁孝天皇御製

立春 天二月二十八日

岩戸あけし神代おぼえて天つ空日かげうららに春は來にけり
白 菊 同

ふきあげの濱の浪風うちよせてそれかとまがふ花のしらざく
祈久戀 同

貴船川いのるねがひの年へてもさらにしるしは水のうたかた
春日 三月二十二日水無瀬宮御法樂(去二月御延引)

むら消の雪まの草もてらす日ののどけきかげに春や知るらむ
櫻 同月二十四日

山ざくら咲きにけらしも霞みつつ高根に見ゆる花のしらくも
雉 同

雪わけし狩場の小野も春といへば萌出づる草に雉子なくなり
同

花鳥の色にも音にもうつらめや物おもふ身のつらきころは
杜 霞 同月二十五日聖廟御法樂(去月御延引)

松梅もかすみにけりな淺みどり北野のもりのはるのあけぼの
池上花 四月二十四日

影うつす岸のさくらの咲きみちて花にぞかすむ春のいけみづ
毎夜待郭公 同

ほととぎす聲もらさなむ夜を重ね待ちふかしぬる心づくしに
月光映露 同

すみわたる月のひかりにみがかれていとど玉しく庭のしら露
霞中鶯 五月四日

たちおほふ霞のひまをもちきては聲もほのかに匂ふうぐひす
廬 橘 同月二十四日

五月雨に花たちばなのうちしめりかをりえならぬ軒のゆふ風
仁孝天皇御製

水 鷄 五月二十四日

夏の夜のぬるま程なき閨の戸をなほ明けよとてたたく水鷄か

海 邊 同

海原やみるめを添へて朝風のなみのまにまにうかぶつりぶね

萩 八月二十四日

小夜ふかく風にくたび音たてて夢おどろかす軒のしたをぎ

冬 月 同

眞野の浦や浪よる尾花しもがれて入江をさむみこほる月かけ

寄弓 戀 同

人心あだちの眞弓おしかへしなびきやするとなほひきてまし

雲間 對月 同月二十五日

晴れやらぬ雲間の影をかこちつつ眺むるままに更くる夜の月

毎秋 愛菊 重陽御會

あきごとに色香を添へて咲きにほふ花の白菊めでつつぞ見る

鶉 九月二十四日

夜をさむみ秋もすゑ野のかた鶉つゆふか草に侘びつつや鳴く

秋 霜 同

咲く菊のはなにかさねて長月のまがきふるさぬ霜のしろたへ

思 同

思河水のうたかたなかなかに消えはてもせでうさのみぞ添ふ

折梅花 十月二十四日

咲きにほふ道のゆくての梅の花いざ家づとに折りてかへらむ

瀧上 蟬 同

落ちたぎつたぎつ岩波こゑ添へてこすゑに高く蟬ぞ鳴くなる

窓落葉 同

夜すがらに風の時雨の窓うつと聞きしは木木の落葉なりけり

仁孝天皇御製

雪上月十一月二十八日

すむ月もふりつむ雪もさやけさのひかりをみがく玉しきの庭

千鳥同

鳴きわたる聲もさむけし小夜千鳥霜みつそらに友さそひつつ

松色久同

うごきなき苔のいはほに立ちそひて緑の松の千代ちぎるかけ

名所雁十二月二十四日

難波江やあしべの友にこゑかはし空とぶ雁のなびくうらかせ

名所炭竈同

おほはらやをしほの山の朝ぐもり賤が炭やくけぶりなるらむ

名所竹同

しげりあふ竹のみどりも降り埋む雪にふしみの里のあさとで

文政五年

禁中春正月二十七日御會始

をりにあふあけ紫のそではへてゆたかに酌むや春のさかづき

春神祇後正月二十四日

春日山そのささらぎの神まつりややちかしとていはふみや人

夏風同

六月の照る日の影もややくれてすすしくかよふ軒のゆふかせ

秋花同

野邊はいま秋にひもとく萩すすき花の千種のにしきをぞ織る

松延齡同月二十六日賜大樹五十賀

みどり添ふ五十の春をはじめにて盡きぬよはひは松の幾千代

春雪散風二月二十二日水無瀬宮御法樂

花はいまだにははぬ庭の朝風におもかげちらす春のあわゆき

花洛春月二月二十四日

名にしおふ花のみやこの春の月かすむもあかぬおぼろ夜の影

歸雁遠同

かすみしく雲路はるかに歸る雁ゆくへやいづこ遠ざかるこゑ

寄埋木戀同

名取川名は埋木のいつまでぞ逢ふことなみに朽ちもはてなで

待 花同月二十五日聖廟御法樂

ちはやぶる北野のもりの櫻ばな神もこころに咲くを待つらむ

若 菜同月三十日

沫雪はちるともよしやうちむれていざ春の野の若菜つままし

八重櫻三月十一日

えならずよ雲とまがひてかけ高く咲きかさなれる八重櫻かな

折歎冬同月二十四日

をしとだにいはぬ色なる山吹は折らばや花のぬしもとがめじ

見 戀同

ほの見つる人の面影忘れずおきふしわかで身に添ふもうし

寄橋雜同

世をわたる身のほどほどに危さもかけて忘るな木曾のかけ橋

葵四月二十四日

ちはやぶる賀茂のみあれに葵ぐさよろづよかけていはふ諸人

戀同

としつきに猶まさりゆく思とも知らでや人のつれなかるらむ

鶴同

和歌の浦やさかゆる松に千代しめて伴ふ鶴のこゑぞゆたけき

初 春同月二十八日

仁孝天皇御製

日の影も今朝はうららに神路山もも枝の松のかすむはつはる

早苗 五月二十四日

千町田に植ゑし早苗の若みどり秋のたのみも見えてすすしき

梅 雨 同

日を経つつをやみもやらず五月雨に色づく梅は落ち盡しても

旅行 同

旅ごろもすそのを遠み分けきつつ袂もぬるるみちしばのつゆ

瞿 麥 六月二十四日

さまざまに庭の籬をあさな夕ないろどる花はやまとなでしこ

夕 顔 同

たそがれの賤が垣ほに咲きかけて露もすすしく匂ふゆふがは

緑 竹 同

生ひそはむ末もはるかに若緑ちひろあるかげの茂るくれたけ

ゆふだち 同月二十五日 聖廟御法樂

雲かせのただ時のまにきほひつつ降るかと思れば過ぐる夕立

薄 七月二十四日

穂に出でてなに招くらむ絲すすきくる人もなき秋の野はらに

雲 同

ありあけの月かげしらむ山の端にひとすぢかかる横雲のそら

鏡 同

みがけなほ光くもらすあさなあさな心もすみて向ふかがみは

嵯峨野 蟲 八月二十四日

所がらわきてあやおる蟲の音や嵯峨野のはらの花のちぐさに

須磨浦 月 同

須磨の浦や關ふきこゆる秋風になみ路をひろみすめる月かけ

葛城山 雲 同

仁孝天皇御製

かづらきや高間の山の秋の色にかかると寒しみねのしらくも

菊添佳色重陽御會

なが月にもてはやされて花の色になほいくしほかまさる村菊

橋 月九月十三日

あやふさも影にわすれて渡るらむ月こそしるべ木曾のかけ橋

秋 浦同月二十四日

いそづたひ行きかふ舟もみち葉のいろにこがるる秋の浦浦

秋 木同

はえあれや錦そめなすもみぢ葉にまじるみどりのまつ村立

秋 鳥同

うらがるる野邊の眞葛のあきかせに夜寒を侘びて鶉なくらし

松上霜十月二十四日

深みどり常磐の松もしろたへに冬をわきつつおけるあさしも

湖千鳥同

鴉の海や比良やまかせに友千鳥ともまどはして立ちさわぐ聲

寄船戀同

いつまでかつれなき人を松浦舟よるべも波にこがれ侘びつつ

霜同月二十七日

おとたてし軒端の萩も枯れふして霜のみふかき庭のさむけさ

霰十一月二十四日

聞さむみ小夜更けぬらし笹の葉にあられ亂るる音も身にしむ

不逢戀同

こがれわび逢はで袖のみしほたるる浦の鹽やく蚤ならねども

山 家同

月はなの都をよそに住みしむるみやまの奥のいほぞしづけき

連日雪十二月二十四日

仁孝天皇御製

消ぬがうへに猶ふりそひて庭の面はただ白妙の雪のこのごろ
年内鶯十二月二十四日

かつ咲きし梅の匂やさそひけむ年のこなたにうぐひすの鳴く
巖頭苔同

あまつ袖なづるやいくよ動なきいはほにかかる苔のころもは

文政六年

霞満山三月七日御會始

春がすみ峰にも尾にもたなびきてひとつみどりの山の色かな

朝霞同月十日

出づる日のかげものどかに山鳥の尾上をかけて立ちかすむ空

水郷霞同月二十二日水無瀬宮御法樂(去月分)

水無瀬がは波ものどかに霞みつつみどりにむかふ山本のはる

花同月二十四日

このごろはいづくも花の咲きみちて色香に匂ふ春かせのそら

月同

秋風の更けゆくままに雲はれてかけ澄みわたるなかぞらの月

雪同

しばし猶はらはで見ばや雪に今朝なびくも飽かぬ庭のくれ竹

立春六月十六日聖廟御法樂(去二月分)

松梅もかすみあひつつ春ははやきた野の杜に立ちはじめらし

風前夏草六月二十四日

吹く風のいろもすすしく白露のたまを散らせる庭のなつくさ

瀧邊蟬聲同

瀧の絲のかかる岩根の木の間より涼しくひびく蟬のもろごゑ

名所眺望同

仁孝天皇御製

和田の原み渡すままにはるばると八十島かけて晴るる夕なぎ

瞿麥露 六月二十五日聖廟御法樂

白露はかざしの玉とおきそへてことに色ますなでしこのはな

七夕天 七夕御會

ひさかたの天の河なみ今宵こそ星のあふせと晴れわたるらめ

萩 盛 七月二十四日

えならずよ濃き紫に咲きみちて露もいろ添ふ野邊のあきはぎ

寄風戀同

思ふ方のたよりをいつとまつの戸に吹くはうらめし軒の秋風

旅 泊同

いく夜はか月を枕にしきたへのうき寐になれし波のともぶね

不知夜月 八月十六日

さやけさは昨日の秋におとらめや名におふ月のいさよひの影

月爲終夜友 同月二十四日

秋の夜の長きもさらにおもほえず見つつなぐさむ月を友とて

鶉鳴草花 中同

萩すすき花のにしきの床しめて鳴くやうづらの聲もえならず

稀逢不絶戀 同

わりなしや絶えはてもせでいつまでか稀なる中にかかる契は

菊重陽御會

名にしおふ長月のけふ月も日もここのがさねに匂ふしらぎく

山路菊 九月二十四日

折る袖にこぼるる色も千代にほふ山路の菊のはなのしらつゆ

紅葉映日 同

露しぐれ染めし紅葉のいくちしほ今ひとしほとてらす日の影

寄繪戀 同

仁孝天皇御製

あだなれや姿こそ見れ寫繪はおもひのかずをいふべくもなし

寄鶴祝 十月二十四日

いくちとせつきぬよはひを契りつつ九重のにはに馴るる友鶴

待初雪 同

かみな月まだ冬あさき朝な朝な待たるるものは峯のはつゆき

河千鳥 同

友千鳥とも呼びかはし賀茂川や瀬瀬にしばなく聲もさむけし

旅行曉 同

逢坂の闇路よふかく越えゆけばはやしののめの鳥のこゑこゑ

冬の田 十一月二十四日

もりすてし人目かれゆく冬の田に残るもさびし賤がかりいほ

人をまつ 同

待つに猶よがれがちなるあだ人をいつまでとてか何頼むらむ

ほし 同

むらくもの晴れゆくままに天の原ほしの林ぞひかりかすそふ

早梅薫風 十二月二十四日

ゆき散らす風にくたびさそはれて春まちがほの庭の梅が香

海邊冬鶴 同

年と共に雪もつものりの浦さむみ立てるやまがふ鶴の毛ごろも

寄山契戀 同

もろともにすゑの松山なみかけて絶えじと契る中のかはらじ

文政七年

子日鶯正月二十四日御會始

松と共に千とせの春を契るらし子の日する野のうぐひすの聲

霞知春 同月二十八日

仁孝天皇御製

うぐひすもまだ告げそめぬ朝ぼらけまづ春みせて立つ霞かな

梅薫風 二月二十二日水無瀬宮御法樂

絶えずなほさそふや軒の春風にうめが香ふかき窓のあけくれ

早 鶯 同月二十四日

春は今日たちぬと思ふあけぼのの霞とともに告ぐるうぐひす

立 春 同

あづさゆみいるさの山に今朝こそは春たちぬらめ霞たなびく

泉 同

まだきより秋もやこもる谷陰のいはもる清水なつをへだてて

初逢戀 同

年月のうさもつらさも新まくらかはす今宵にわすれ果てぬる

尋 梅 同月二十五日聖廟御法樂

尋ねばやいづくはありともかげ高きこの神垣の梅のいろ香を

絲 櫻 三月二十四日

いと櫻いと長き日にくりかへし花のちすぢを飽かすこそ見れ

燕 同

花の香を吹きいるる風にさそはれてこすの外ちかく燕なく聲

戀 風 同

おとづれにあらぬ物から松のとの風はさすがに頼まれぞする

新 樹 四月二十四日

陰なれし花はいつしか散りはてて若葉に茂る木木もえならず

郭 公 同

子規はや鳴かなむと待ち侘びて寐る間をさへもをしむこの頃

夏 月 同

うたたねの枕すすしくさす影にうちおどろけば明くる夜の月

五月郭公五月二十四日

仁孝天皇御製

時鳥おのがときとや夜をかさね五月のそらにこゑもをしまぬ

池朝菖蒲五月二十四日

いとど猶かせにかをるはえならずよ朝露ちらす池のあやめは

山家送年同

いくとせかあらしの音を聞きなれて住みしめにける山の下庵

夏 月同月三十日

水の面にすすしく月の影すみてさらに夏ともおもほえぬかな

夏 朝六月二十四日

てらしつる夜半のほたるは影きえて朝日すすしき露の草むら

秋 山同

たちこめし霧ふき晴れて見わたせば秋風たかきおほ比叡の山

冬 鳥同

散り浮ぶ木の葉と見えて池の面の波のあやなす鴛鴦の幾群

夏 草六月二十五日聖廟御法樂

はえあれや小百合撫子いろわきて草のまがきの露に咲くかけ

星夕言志七夕御會

たなばたもねがひの絲のすゑ絶えずかけし契や幾千千のあき

萩 花七月二十四日

こむらさき草のまがきの白露にはころぶ萩のはなぞえならぬ

女郎花同

女郎花あだなる花と見ながらも色めく野邊は過ぎがてにする

尾 花同

秋きぬとはや穂に出でてまねくなり尾花が袖の露のゆふかせ

月前風八月二十四日

萩の葉のそよぐゆふべの秋かせに軒端くもらす月ぞさし入る

浦 月同

仁孝天皇御製

鹽竈のけぶりもそらにたち消えて見るめさやけき月のうら波

月前鈴蟲八月二十四日

澄む月のかけをやあかず鈴蟲のふり出でて鳴く聲もさやけし

雁後八月二十四日

はなの春みやこの空を見すてしも月の秋にはなびくかりがね

礎同

身をさへも更けゆくあきの小夜ぎぬた恨かさねて衣うつらむ

契同

そこひなくなほ行末もいもせ川たえぬながれを契りかはして

菊花宴久重陽御會

いくめぐりつきぬ言葉を契りつつ千年も酌まむ菊のさかづき

月前風九月十三日

さらでしも雲はかからぬ月かけをなほみかくとや秋風の吹く

初紅葉九月二十四日

むら時雨まだしたぞめの初紅葉これもえならぬ色とこそ見れ

夕紅葉同

夕日影いまひとしほと染めつらしいとど色ます庭のもみぢ葉

名所紅葉同

いくちしほ名にも立田の山ふかく麓をかけて染めしもみぢ葉

海路十月十日

沖つ風いたくな吹きそさらでしもわたりあやふき波のとも船

落葉交雨十月二十四日

たてぬきに木の葉と共にふり出でて錦こきみだる村時雨かな

殘菊猶匂同

匂はずば知られざらましおく霜にうづもれ残る庭のしらぎく

海路浪遙同

和田の原こぎゆく末もしら浪をはるばるわたる沖のともぶね

夕 雪十一月二十四日

夕ぐれの道たどたどし降りつもる光ぞしるべ野邊のしらゆき

浦邊雪同

明石潟うらかせさむみ見渡せば雪に漕ぎゆく海人のつりぶね

寄雪祝言同

ここのへに山つくりける白雪はげにとよ年のしるしなるらし

歳暮述懐十二月十五日

學ぶ書も調ふる絃もそこはかとあらでぞ年のくれゆくは惜し

梅告春近十二月二十四日

はるちかくなりけらしな白雪の降りつもる枝に匂ふ梅が香

名所炭竈同

名にたかき大原やまの冬されば絶えずぞけふる峯のすみがま

契行末戀同

もろともにゆくすゑ絶えずあだ浪はかけじと契る戀のなか川

文政八年

春竹添色 正月二十八日御會始

千尋あるかげもひとしほ色そひてげに春しるき庭のくれたけ

嶺樹帶霞 二月四日

立ちならぶ松の緑のいろ添へて高嶺のどかにかすみたなびく

待花日暮 同月二十二日水無瀬宮御法樂

櫻花はや咲かなむと待たれつつ幾日こすゑをながめくらしつ

早春霞 同月二十四日

山の端の雪もさながらたちこめて春のいろ知る朝がすみかな

朝郭公同

仁孝天皇御製

天の戸の明くるあしたに時鳥またれし夜半のこゑなのらむ

里落葉二月二十四日

冬されば時雨とともに降りそひて木の葉ぞふかき山陰のさと

早春同月二十五日聖廟御法樂

かみがきの霞とともにほころびてまづ春みする梅のはつはな

春 月三月八日

えならずよ尾上のはなの雲間よりかすみてにほふ春の夜の月

躑躅紅同月二十四日

いくしほもゆふくれなゐの色そひぬ岡邊の躑躅てらす日影に

歎冬盛同

さとの子も心やそめむものいはぬいろにさかりの井手の山吹

寄藤戀同

おもふその契にかかれ藤かづらふかむらさきの色をゆかりと

岸卯花 四月二十四日

賤がさらす布とも見えて玉川やきしねつづきに咲ける卯の花

夕待郭公同

夕月のほのめく影を見てもなほ鳴くね待たるる山ほととぎす

夏 笛同

あげまきがかよふすさびか草ふかき夏野のはらの笛竹のこゑ

郭 公 五月二十四日

時きぬと信太の杜の梢より千枝にふり出でて鳴くほととぎす

樽 花同

なつかしき藤のゆかりの色みせてさくや樽のはなもえならず

眺 望同

五月雨の晴るるゆふべに見わたせば高根すすしく入日さす影

夏 雨 六月十日

六月のたへの暑さも降るほどははらひてすすし風のむらさめ

地 儀六月二十四日

月になほみがくすがたの涼しきは夏のほかなる雪の富士の根

鳥同

ここかしこ魚のよるせか河みづにみのけも濡れてあさる白鷺

神 祇同

天照すかみのめぐみに幾代代も我があしはらの國はうごかじ

扇 六月二十五日聖廟御法樂

夏はただならず扇よあつさをもよそに吹きやる風のすすしさ

七夕鳥 七夕御會

鳥の音もこのあかつきは心せよ年にひと夜のほしあひのそら

秋植物 七月二十四日

庭のおもに花のちくさを植ゑてこそ野もせの秋の錦をも見れ

秋動物同

初秋もおのが心は夜やさむきまだきにき鳴くころもかりがね

戀雜物同

思をば涙とともにかきこめて今朝やるふみはあはれとも見よ

月前鹿 八月十六日

妻戀のよるのおもひもいかならむ晴れわたる月に牡鹿なく聲

峯月照松 同月二十四日

影はれててらせる月の峯たかみ立ちならぶ松の數も見るべく

寄雁戀同

ものおもふ我がたぐひかも秋風に鳴きてぞ來つる衣かりがね

秋 浦同

もしほやく蚤のいそやはいぶせきに猶たちまよふ浦のあき霧

菊有長生種 重陽御會

仁孝天皇御製

秋ごとにつきの言葉の種なればさかりもいくよ白ぎくのはな

月契多秋九月二十四日

名におふもげに長月の光ぞとちぎり盡きせぬいく千代のあき

紅葉下菊同

えならずよ秋のにしきのいろいろは紅葉のかげに匂ふむら菊

名所浦鶴同

幾千年さかえむ道をまなづるもゆたかにあそぶ和歌の浦なみ

朝霜十月二十四日

冴え冴えし有明の鐘にこのあさけ思ひあはする霜のしろたへ

雪中残雁同

降る雪に道たどたどし天つかり月にきななばまどはじものを

庭早梅同

うぐひすもさそはれつべし梅が香の春まつ庭にまだき匂ひて

朝雪十一月二十四日

松竹もきしもまがきもうづもれてただ白雪のあさとでのには

水鳥同

池みづの水のここによもすがら浮寐わびてや鴛鴦の鳴くらむ

祝言同

もののふのやしまの波もうごきなく風ゆたかなる葦原のくに

庭雪積十二月十七日

庭のおもは雪よりほかの色もなしうべ九重に降りつもりつつ

曉天千鳥同月二十四日

友千鳥とも呼ぶこゑもさむけしな霜夜の月のありあけのそら

契久戀同

契りてしそのかねごともしいたづらに空しく過ぐる中ぞ久しき

和琴同

仁孝天皇御製

たぐひなきあづまの琴のしらべこそ神代の風を吹き傳へけれ

文政九年

春天象 正月二十四日御會始

花鳥の色音をこめて春の日のひかりのどかにかすむそらかな

立 春同月二十七日

山鳥のをのへのどかに霞みつつ今朝しも春は立ちかへるらむ

春草處處 二月二十二日水無瀬宮御法樂

ゆきぎえの春を見せけりむらむらにこのもかもの草の緑は

山早春同月二十四日

うちはへてのどけき風の音羽山ふくよりなびく春がすみかな

田家鹿同

秋田もる賤が夜さむの友ならむかりいほ近くをじか鳴くこゑ

増 戀同

つれなしと思ひすててもなかなかにまさるや何の迷なるらむ

花間月同月二十五日聖廟御法樂

神もさぞ飽かすことや見む木の間もる月に霞める花のさかりを

春曙花 三月二十四日

よこ雲のかすむ匂にえならずも高嶺のはなのしらむあけぼの

苗代蛙同

今日しもやみづまかせつる苗代に小田の蛙のところえて鳴く

鞆旅野同

のる駒のこゑものどかにはるばると霞をわくる武藏野のはら

若 竹 四月二十四日

ことしおひの陰すすしくも淺緑さえだにむすぶ露のわかたけ

橘同

仁孝天皇御製

今年より千代の五月も匂はなむ植ゑしみなみの庭のたちばな

夏 月四月二十四日

かささぎのわたせる橋の白妙にかけ見るほどもなつの夜の月

朝 霞 同月三十日

山の端の明くるあしたの浅みどり春するいろに霞みそめつつ

名所旅 五月十七日

宇津の山こゆるやうつつ故郷をゆめにもしのぶ薦のほそみち

山郭公 同月二十四日

たづねこしかひありけりなあしびきの山時鳥鳴きわたるこゑ

浦郭公 同

須磨明石うらづたふ聲はすすしきの月にあくがれし時鳥かも

里郭公 同

ときぬとをちこちわかす里なれて鳴くや五月の山ほととぎす

朝納涼 六月十五日

あさまだき衣手すすし軒端より風も吹きわたる庭のやりみづ

なでしこ 同月二十四日

白露のおきてひとしほ色ぞ添ふ大和なでしこはなのにしきも

おち葉 同

散りしきて唐くれなるの唐にしき庭は木の葉に冬もやつさず

あかつき 同

かねの音とりの聲よりあかつきをしるくも見する明星のかけ

蘆間 同月二十五日 聖廟御法樂

すすしくも葉のぼる露と見えてけり蘆のしげみにすがる螢は

七夕 述懐 七夕御會

星やさぞこころすすしきこよひぞと思もはれし天のうきぐも

蘭 七月二十四日

仁孝天皇御製

むらさきの色なつかしみほころびて露さへにほふぢ袴かな
葎七月二十四日

ややさむき草葉の床のつゆ侘びて枕とひよるきりぎりすかも
恨同

よにもうきえにしなるらむ蟬衣うらみばかりに潮たるるとは
月下薄八月十六日

いさよひの月にみがきて花薄いとどしろたへの袖ぞつゆけき
名所原月同月二十四日

秋風の吹きはらふままに波はれてさやけき月のうきしまが原
名所瀧月同

かめのをの瀧のしら玉よと共に千代の數をもみがく月かけ
名所濱月同

こころなき海人の小舟もおのづから打出の濱の月のさやけき

庭籬菊重陽御會

色に香に庭のまがきをよそほひて今日なが月とにほふ菊かな
庭上菊九月二十四日

庭の面やこもかしこもうつろはすうべ長月のはなのむら菊
紅葉有淺深同

露しぐれ染めはつくさぬ程みえて薄きも濃きも交るもみぢ葉
對月惜秋同

菊紅葉いろはふりつつなが月も暮れゆくかげに名残つきせぬ
瀧音幽同

山ふかみ落つる岩根をたづねまし音かすかにもひびく瀧なみ
鶉十月二十四日

うらがれの尾花の床のあれゆくを侘びてや鶉よただ鳴くこゑ
寒松同

霜雪のむすぼほる枝に音たててたたくもさむし庭のまつかせ

寄衣戀 十月二十四日

夢だにとかへすもあやな小夜衣うらみのみなるつらさ重ねて

名所山雪 十一月二十四日

朝夕にむかふ大比叡の山の端もなほかげたかく雪ぞ降りつむ

名所野雪 同

しなが鳥ゐなの笹原そよいまはおとせぬ雪のつもるしづけさ

名所浦雪 同

沖つかせ吹きさそひきて波ひろく雪になるみの浦のあけぼの

梅始開 十二月二十一日

春はいまだ朝霜むすぶ庭の面にはやくも咲ける梅のはつはな

庭冬月 同月二十四日

やりみづの流もこほる庭のおもの真砂の月のかげぞさむけき

歳暮梅 同

しら雪のつもれる年もわかかへる春まちあへすにほふ梅が枝

冬 鶴 同

降りつもるみぎりの雪にたちまがふつばさくもらぬ鶴の毛衣

文政十年

每日有春色 正月二十八日御會始

朝日影かすみし日よりいく日へて四方にあまねき春の色かな

霞裏聞鶯 二月十三日

たちこめし霞をもるる聲はなほのどかにぞ聞く春のうぐひす

曉聞鶯 同月二十二日水無瀬宮御法樂

春の色をみなせの山の有明にたむけて告ぐるうぐひすのこゑ

初 花 同月二十四日

吹く風のなほ冴えながら春ぞとてひもとく今朝の花は珍らし

夕 花 二月二十四日

長き日も飽かずながめし色も猶いまひとしほの花のゆふばへ

河 花 同

あたら色のうつろふことは早瀬河花にかけてよ水のしがらみ

簾外燕 三月二十四日

花の香を吹き入るる風にさそはれて小簾の外ちかく馴るる燕

名所藤 同

咲きかかる岩根の藤にしらいとも春はむらさきの布引のたき

契別戀 同

契りおくその言の葉になぐさめて別れむとするも思こそ添へ

春 朝 同 月 二十五日 聖廟御法樂去月分

松梅もかすみあひつつ朝日かげのどかに匂ふかみがきのはる

山路櫻 三月二十六日

あくがれてこのもかもの櫻狩きのふも今日も山路わけつつ

卯月郭公 四月二十四日

卯のはなの垣根の月にほととぎす忍ぶはつ音ももらす夕ぐれ

枯 野 同

枯れわたる野原を見れば霜の花に秋のにしきの色はのこらす

寄絲戀 同

人はいかによりあはむとも白絲の我が心のみむすばほれつつ

夏月透竹 五月二十四日

すすしくも竹の葉そよぎ吹く風にひかり見えすく夏の夜の月

水 鶏 同

いとど猶夢むすぶまも夏の夜やうたて水鶏におどろかさされて

雨後山水 同

仁孝天皇御製

五月雨のなごりか山は雲まよひ河はみかさのまさるこのごろ

蓮 六月七日

いろくづのひれふる數もよりくるや池の蓮のかげのすすしさ

春 風日不明

佐保姫のかすみの袖もうちなびき天つそら吹く風ののどけさ

鶺鴒河螢同

かは瀬こぐ鶺鴒舟のかがり數そふと見えて螢の飛びちがふかげ

原上旅宿同

月ばかり枕とひつつ幾夜半かたび寐つゆけきむさし野のはら

百 合 六月二十五日聖廟御法樂

波と共に露もすすしくみだれ散る野嶋がさきの風のさゆり葉

冬雜物後六月十一日

埋火によりそひて猶まきかへしふみ見る夜半は冬もわすれつ

秋花夏開 同月二十四日

夏ながら秋たちしとやこのごろはまだきひもとくはなの百草

納凉水同

すすしさは夏をばよそに遣水のながれまぢかくいざ圓居せむ

聞聲忍戀同

近となり聲きくたびに忍びつつかけ見むことはかたき中かな

天 河 七夕御會

彦星の今日あふせとや天の河なみのうきざり晴れわたる見ゆ

萩 七月二十四日

宮城野のさかりはさぞな九重にえならすにほふ萩の戸のはな

松 蟲同

誰がとふとなに松蟲のゆふべゆふべ野もせを廣み鳴きしきる聲

楓同

ここかしこ染めし千入の木木の中に楓の紅葉ことにこそ見れ

月前葢八月十六日

きりぎりす露わびて鳴く聲までも夜すがらすめる秋の月かけ

小鷹狩同月二十四日

嵯峨の野やはなの千種を踏みわけて立ついろ鳥にいさむ鷹人

馴 月同

夜をかさね飽かず馴れゆく影になほ月こそ秋の友となりぬれ

水邊秋同

あきかせに霧ふき晴れて水きよみ心もすめるかはづらのさと

菊匂留袖 重陽御會

かざしにと庭のしら菊をりつれば深くも袖にうつるはなの香

春 雨 九月二十四日

降るままに春の日數のかすみ添ひ花をもよほす雨ののどけさ

菊同

谷川のながれも花のひかり添ひえならずにはふ岸のしらぎく

後朝戀同

見送るも見歸るも共に袖ぬれて別れうかりし今朝のきぬぎぬ

忍 戀 十月十九日

ともすれば涙のしぐれ降りそひてしのぶ袂のいろやかはらむ

時 雨 十月二十四日

かみな月空のならひと夕づく日しぐれの雲に晴れくもるかけ

落 葉 同

こがらしの梢をはらふ音たてて散るや紅葉のまどをうつかな

戀 風 同

もの思ふ我がこころより吹く風の聲もつてかと耳にとまれる

池寒蘆十一月二十四日

仁孝天皇御製

霜さゆるみぎはこほりて池の面にのこるもさびし蘆の冬がれ

聞 霰十一月二十四日

小夜ふかみ聞の板戸におとするは嵐のさそふあられなるらし

寄帯戀同

むすびそめ思ひみだれす下帯のなほうちとくる中ぞしたしき

笈上霜同月二十七日

大井河くだすもさむきいかだしの袖の霜はらへ峯のあさかせ

惜 秋十二月十七日

行く秋のなごり思ふは我れのみかまがきの蟲もうらみ聲なる

千どり同月二十四日

賀茂川やみがける月のきよき瀬になほ聲さゆる小夜千鳥かな

うづみび同

埋火になほよりそひて圓居するあたりはさらに冬なかりけり

年のくれ同

暮れて行く年のなごりはつきせねど心いさむや春を待つとて

文政十一年

鶯鳴梅 正月二十四日御會始

梅が枝の春しめて鳴くうぐひすや花のかをりを聲のにほひと

霞始聳同月二十六日

あらたまの年の光をまづ見せて空ものどかに立つかすみかな

待 花二月二十三日

くりかへし待たれ待たれて暮ると明くと心にかかる花鬘かな

立春日同月二十四日

鳥が音もこのあかつきは長閑にて明くれば春とかすみ日の影

女郎花同

仁孝天皇御製

女郎花きりのまがひにほの見えて面はゆげなる色はなつかし

田家鳥 二月二十四日

小山田のいほりま近く春しめて鳴くうぐひすは賤もたのしむ

霞 同月二十五日 聖廟御法樂

佐保姫のかすみの袖をはなやかにかけてよそほふ春の山の端

花映日 三月二十二日 水無瀬宮御法樂(去月分)

朝日かげてらす水無瀬の山たかみさかりの花も雲と見えつつ

遊 絲 同月二十四日

菅の根のいと長き日にいとゆふの絲くりかへし靡くのどけさ

蛙 同

みがくれて鳴くや蛙のもろごゑものどかにぞ聞く春の小山田

逢 戀 同

あさからぬ人の言葉に年月のうらみもこよひ解けししたひも

苔上花 同月二十六日

散りしきて上はしろたへ下はみどり花と苔とのはるの山みち

戀 袖 浦 四月二十三日

浦の名の袖はしほひにしほたれて干すひまもなく戀ふる年月

牡 丹 同月二十四日

朝な夕なそむる心もふかみ草げにたぐひなきはなとこそ見れ

五月雨 同

さみだれは月のみふねも幾夜半かへだてて雲の波ぞ立ちける

螢 同

あつめねど螢ぞてらす窓のうちおこたる書をかけにいさめて

水郷郭公 五月二十一日

水無瀬河聲はいづこにありて行く山本とほく鳴くほととぎす

早苗多 同月二十四日

賤はさぞうれしと見つつ思ふらし千町にあまる水のわかなへ

五月雨 五月二十四日

夏引のてびきの絲のながき日に猶くりかへしさみだるるそら

海上舟同

うなばらや波もをさまるときつ風つれてゆたかにかよふ友舟

紅梅遅 六月十九日

くれなるのこぞめの色は春ふかく待たれて咲ける梅の幾しほ

夏 草 同月二十四日

夏草の茂るもよしや來む秋にいろいろの花の咲くをおもへば

五 節 同

あきらけき月に幾たびえならずもかへす少女の袖のよそほひ

待人戀 同

慕ひても恨みてもつらき仇人を猶よなよなに待つがわりなさ

夏 露 同月二十五日聖廟御法樂

神のめぐみ夏しら露のかかればぞいがきの本草ことに涼しき

七夕琴 七夕御會

手向にところの絲もひく琴のしらべを竹はいかが聞くらむ

風底萩 七月二十四日

露かけて吹きくる風の秋のこゑは軒端の萩のそこに聞きつつ

尋 蟲 同

百草の花野をわけてたづぬればなれも我れをやまつ蟲の鳴く

戀餘波 同

いまはとて思ひすてしをいかに猶なごり消えやらぬ戀草の露

春 朝 八月二十四日

山たかみかすみでのぼる朝日かげのどかに匂ふ花のしらくも

夏 河 同

仁孝天皇御製

波を吹く風になびきて河の瀬にむれつつ鮎のはしるすすしさ

秋 祝八月二十四日

民の戸のとしある秋の穂に出でて千町の稻葉なびくゆたけさ

名所櫻 同月二十五日

はるはまた櫻にも名の立田やまた夕日いくしほかすみ添へつつ

菊匂随風 重陽御會

ながつきの今日咲く菊の花ざかり庭の秋かせ香にほひつつ

秋山朝 九月二十四日

あさかせに霧のとばりは吹き晴れて紅葉のにしき匂ふ山の端

秋野夕 同

あきふかみ露ふくかせも身にぞしむ鹿の音さびし野邊の夕暮

秋浦夜 同

よる波の夜をながつきの影みつつさぞな心もすまのうらびと

霜夜月 十月二十四日

すむ月のかげもひときは白妙に見えて霜みつる空のさむけさ

冬 顯戀 同

白雪のふりかくせどもいかにしてよそに知られしこひの通路

冬 竹 同

小夜風のさやぐも寒き竹の葉のまた音そふやあられなるらむ

月光映水 十一月二十四日

ひもかがみ曇らぬひかりなほ添ひて月にみがくもさむき池水

寒雁添聲 同

空さむく雪をはぶきて來る雁にあしべの友もこゑかはしつつ

關路行客 同

かげくもるふぶきいとはで杉むらに旅人つどふあふさかの關

柳 十二月二十四日

風にけづり露によそほふみだれ髪いとえならずもなびく青柳

秋 雨十二月二十四日

八千草のまがきもこめし秋霧の晴るると見れば雨そそぐなり
神 樂同

霜ゆきになほしらゆふの袖はへて舞ふも謠ふもすめる夜神樂

文政十二年

浪澄鶴影浮正月二十四日御會始

水かがみうつるすがたものどけしな春の池邊のなみの友づる

早春水同月二十六日

はるきぬと氷ながれて浅みどりかすみもにほふ庭のやりみづ

春風解水二月二十二日水無瀬宮御法樂

山本やのどかに春の風みえてこほりもなみのみなせがはかな

待 花同月二十四日

きさらぎや時しきぬれど風さえて猶まちどほの花ざくらかな

水郷花同

大井がは花のさかりになりにけり色香になびくいかだしの袖

花 錦同

名にしおふ都の春のひかりかないづくも花のにしきかさねて

尋 梅同月二十五日聖廟御法樂

香をしるべこの神垣に尋ねきてえならぬ梅の咲きしをぞ見る

春 日三月七日

のどかなる彌生の空のけしきかな照す日影もかすみにはひて

梨 花同月二十八日

春ふかき山路もゆきの残るかとよそめに見しは梨の咲くかけ

杜 若同

仁孝天皇御製

池水に春をふかめて咲く花は濃きむらさきのかきつばたかな

躑 三月二十八日

夕日かけてらす岡べのいはつつし今ひとしほの花のくれなる

梅花琴上飛四月二十四日

琴の緒のしらべも花の香をやそふ梅ちりかかる軒のはるかせ

水邊唯避暑同

くめばなほ夏もしら波ながれ出でてまとる涼しき庭の眞清水

遠近雪光満同

野邊山邊みちゆく人やたどるらむ遠近わかぬゆきのひかりに

雪中興遊五月十五日

おもふどち袖うちかざし駒なべてゆくゆくめづる雪の野山路

夏 草同月二十四日

夏の野もさゆりなでしこあぢさゐに草の錦のあきばかりかは

照 射同

思ひやれこれも世渡るわざなれど照射に鹿のさわぐあはれを

戀 月同

さやけさも我が涙よりくもりけり物おもふ袖にをしき月かげ

瞿 麥六月八日

咲きしより唐くれなるのからにしき籬よそほふ花のとなつ

簷夕顔同月二十四日

たそがれにほのぼの軒をとひしよりちぎりぞかかる花の夕顔

朝氷室同

いりがたの月ものこりて氷室山いとどすすしき谷のあさかせ

瀧邊蟬同

すすしくもみだれあひけり松陰に瀧のしらいと蟬のもろごゑ

夏月明同月二十五日聖廟御法樂

仁孝天皇御製

照る影に猶すすしさはましみづのながれくもらぬ夏の夜の月

乞巧奠七夕御會

秋いく世なほつきせじな今日ごとの星の契もにはのたむけも

槿七月二十四日

空の色にすすしく咲きておく露は星のひかりの花のあさがほ

露同

百草におきみだれつつ白露のわがものがほの野邊のゆふぐれ

筏同

柚木つみかよふ谷川の瀬をはやみせかれてもなほくだす筏師

菊粧如錦重陽御會

ませの中にとばりよそひて唐錦おりかくる花は菊のたてぬき

擣衣九月二十四日

うつたへの聲もしきりて小夜ぎぬた聞くに夜寒の哀さぞ添ふ

紅葉同

薄く濃き紅葉のにしきたてぬきにおりわけ染むる衣手のもり

逢戀同

年月にうらまじものを今宵しもかくうちとくる中と知りなば

朝時雨十月十三日

朝日かげほのめくみねに村雲のかかると見れば時雨ふるそら

落葉同月二十四日

白妙の霜の真砂をくれなるにふかくも染めて散る木の葉かな

不逢戀同

せめてただ假初にだに逢ふよしのあらば思をいひもはるけむ

旅同

たびごろも鄙の長路にかさねきて昨日も今日も袖ぞしぐるる

浦傳千鳥十一月二十四日

仁孝天皇御製

須磨あかし霜夜の月もかげさゆる波路の千鳥うらづたふこゑ

夜寒重衾十一月二十四日

埋火のひかりもあれど冴ゆる夜は衾をいくへかさねてぞぬる

雪中眺望同

こすまきて外山を寒み見わたせば雪に朝日のかげぞかがやく

名所雪十二月二日

名にたかきあたご大比叡おしなべてただ白妙の雪のやまやま

河千鳥同月二十四日

佐保川や棹のしづくもこほる夜に舟とふ千鳥こゑのさむけき

竹雪同

はらへどもあとよりつもる雪にけさ下折おもき庭のなよたけ

歳暮松同

雪と共に年もつもの浦さむみ磯邊にはるをまつのひとしほ

文政十三年(天保元年)

松風調琴正月二十四日御會始

のどかなる春のしらべのこゑ立てて琴にぞかよふ軒のまつ風

餘 寒二月四日

春がすみいまきさらぎの頃ながらまた冴えかへる朝かせの空

氷始解同月二十二日水無瀬宮御法樂

山本の雪は消えねど水無瀬がほこほりを波にかへすはるかぜ

霞同月二十四日

はるなれや風なほさむき朝戸出もしかすが霞む山の端のそら

紅葉同

立田姫いかに染めてか唐にしきやまとに見する山のみぢ葉

海同

仁孝天皇御製

さしのぼる日影に見れば和田の原かぎりも波の晴るる朝な
子 日二月二十五日聖廟御法樂

ちはやぶる北野の野邊に子の日して恵さかゆる小松をぞ引く
春夕月三月七日

ひばり鳴く春の野原の見わたせば花の小草のにしきかすめり
花 霞 同月二十四日

たちこめし霞がくれはひとしほに猶しのぼるる花のおもかけ
田 蛙 同

賤のみか苗代みづは我れももると蛙のこゑのすだくをやま田
風 帆 同

真帆に見え片帆に見えて浦波にこぎつるる舟や風のまにまに
みぬ人こふる後三月七日

それとのみ聞きし思にいく月日みぬ人こふるこひぞよじなき

夏 同月二十四日

ほととぎす聲をももらせ夕月にひかりをかはす庭の卵のはな
秋 同

露かかる萩のうは風そよぐ音の秋を知ればやき鳴くはつかり
戀 同

こがれつつつれなき戀をするがなる富士の煙も胸のけぶり
新樹露 四月二十四日

若みどりしげるわか葉の木木の枝にむすびてすすし露の白玉
郭公待 五月 同

かたらふは五月の空とおもふにも猶またれつる山ほととぎす
遇不逢 戀 同

あはぬまのつらさ恨みしそれさへも今は憂身に慕はれぞする
卯花盛 同月二十七日

仁孝天皇御製

青葉さへ見えぬばかりに咲きみちてただ白妙の卯の花のかけ

郭公數聲 五月二十四日

雨になき月にかたらふほととぎすおのが時ぞと聲しきるなり

海郭公同

ほととぎすなれも影をやめでて鳴く月の明石の波のよるよる

郭公稀同

ほととぎす頃すぎぬとや五月雨の晴れゆくままに遠ざかる聲

夏夜月庭 六月二十四日

月かげのくまなくてらす夜もすがら涼しさあかぬ庭の眞砂地

瀧上蟬同

あひにあひて涼しかりけり岩がねの瀧のひびきに蟬のもろ聲

騷 旅同

たび衣きのふは山路けふは野路あすは船路とたちかはりゆく

瞿麥露 同月二十五日聖廟御法樂

いろいろにしける錦のとこなつを今ひとしほと露やむすべる

萩 露 七月二十四日

折りとらば亂れやすると惜めども見つつやむべき萩の露かは

寄蟲戀同

思ひわびわれも夜すがら音になかむ草の茂みの蟲ならねども

浦 舟同

須磨の浦や名におふ秋の月夜よし夜よしとうかぶ海人の釣舟

雲收月明 八月二十四日

心あれやさやけき影をへだてじと月いづるそらに晴るる浮雲

鹽屋月同

煙さへかげに消たれて須磨の浦しほやさやけき月の夜な夜な

寄月祝世同

仁孝天皇御製

ひさかたのそらすむ月は秋津洲のよもゆたかなる萬代のかけ

菊有延年色重陽御會

さざれ石のいはほとならむ秋幾世猶つきせめや菊のさかりは

庭紅葉九月二十四日

染めつくす山の千しほやいかならむ砌もふかき秋のもみぢ葉

寄秋雲戀同

つれなしや人のこころの秋みせてあはれ白雲の隔てはてぬる

秋野同

八千くさの花もうつろふ秋ふかみ野をさむしとや鶉なくこゑ

松霜深十月二十四日

ふかみどり茂るみぎりの松の葉に重ねてしろくおける霜かな

水鳥多同

枯蘆もむすぶこほりも毛ごろもをひとつ錦のいけのみづとり

相思戀同

もろともにかかる思の中ならば人をも身をもなにうらむべき

雪隨風十一月二十八日

音たてて吹き誘ふ空にうちきらし降りしきる雪ぞ風のままなる

花洛雪同

散りかふも花の都の名にあひてかをるばかりの今朝のしら雪

望雪同

辛崎の松もしろたへにうづもれて雪をのせゆく志賀の浦ぶね

早梅句十二月二十四日

年さむきまだ冬ながらこの朝明はるのたち枝とにほふ梅が香

歳中鶯同

今日たちし春をば聲にまづ告げて年の内にもきなくうぐひす

巖上苔同

仁孝天皇御製

ちとせふる巖が上の苔むしろなほいく世世にしきかさぬらむ

天保三年

二月四日從禁裡御所大樹公六十御賀被進之御

懷紙寫賜御賀

寄竹祝言

吳竹のすぐなるかげはいく萬よはひも世世にかぎりあらじな

天保十五年(弘化元年)

都祝言正月二十四日御會始

をさまれる花のみやこの長閑さになべて知らるる日の本の春

霞同月二十八日

のどけしといふもさらなり明るるより春のものとして靡く霞は

若 菜 二月二日

雪はみな解けて幾日の春の野にもゆる若菜ぞややみどりなる

初 春同月二十四日

いとはやも春めきわたる景色かな年は一夜に明けそめしより

郭 公同

つれなしと何かこちけむほととぎす五月きぬれば幾夜なく音を

浦 月同

すみよしや松ふく風にかげ晴れて浦わさやけきなみの月かな

山 霜同

雪かともまがふばかりに置きわたす見わたし寒き霜の山の端

窓 竹同

吹きいるる聲ものどかに窓ちかく千代をならせる竹のはる風

八重櫻三月二十四日

仁孝天皇御製

八重櫻やへにかさなるながめかな昨日より猶今日はさかりに

簾外燕三月二十四日

つばくらめこそこの春も朝夕こすに馴れて鳴くこゑ

庭上竹同

松ならでこれもひとしほのふか緑いろそふ春の庭のくれたけ

子日松四月六日水無瀬宮御法樂(去二月分)

引きはやす子の日の今日を待ちえてや野邊の小松の緑そふ陰

初 花同日聖廟御法樂(去二月分)

昨日までまがひし雲の山の端に今朝はまことの花ぞにほへる

喚子鳥 同月二十四日

咲く花を誰れ見よとてか呼子鳥こゑものどけき春のみやまに

卯 花同

神まつる時きにけりと木綿かけてさやかにも咲く森の卯の花

鹿同

霜もややをかべの鹿のこゑすなり夜寒わびつつ妻や戀ふらむ

鷹 狩同

鷹人のさもいさましく見ゆるなり思ふかた野の鳥立もとめて

曉同

有明かねざめする間もなつの夜の聞のとぼその白むすきかげ

山 霞 五月十四日水無瀬宮御法樂

いつも見し山のみどりも春きぬとひとしほ染めて立つ霞かな

梅 同月十六日聖廟御法樂

うぐひすもかすみもあれど神垣にまづ春しるは梅のはつはな

鷺同

鳴けや鳴け猶いく夜半に幾聲を聞くと飽かぬ山ほととぎす

雪同

十かへりの花とも見えて神垣の松のみどりにかかるうすゆき

梅雨久五月二十八日

梅の實は日を経るままに色づきて猶さみだれのひさかたの空

撫子露同

おほしたてし人の心の露かけてただには見えぬ庭のなでしこ

寄風戀同

吹けばしたひ吹かねばうらむ心なき風をば人の音づれにして

夏草深六月四日

言の葉もふかくなりゆくこの時となほみがくらむ露のなつ草

寄鶴祝同

敷島のみちの友鶴もろごゑになほいく千代もきこえあげなむ

花半開同月二十四日

片枝まづほころぶ色のえならぬにさぞな盛のはなぞ待たるる

首夏郭公同

弓張のうづきの影にひかれてやまだき初音を鳴くほととぎす

郭公何方同

いづかたと定めぬ程に鳴きすてて物思はするほととぎすかな

舟中翫月同

いく千里いくへの波も漕ぎゆかむ船路を月のてらすかざりは

社頭雪同

神垣はさすさかき葉の青にぎてまたしらにぎて雪ぞかさぬる

立 春同月二十五日聖廟御法樂

浅みどり立ちにけらしと春みせてかすみもなびく神垣のまつ

納 涼同

ちはやぶる恵の風にさそはれてここにきた野の杜のすすしき

七夕枕七夕御會

仁孝天皇御製

こよひこそ星のおもひも波枕ながれ絶えじとさぞかはすらめ

朝 萩七月二十四日

とのもりの朝清めする袖までもむらさきにほふ萩の戸のあき

夕 薄同

夕日かげいるさのやまの裾野よりこころありげにまねく小薄

夜 夢同

夢といふ物なかりせば寐ぬる夜に晝のすさびをいかで見るべき

嶺 霞八月十四日春日社御法樂

春のくるひかりあまねく三笠山たかねの松のまづかすみつつ

夕草花同月二十四日

今朝よりは又おりそへし錦かな野邊のちぐさの花のゆふばえ

月似雪同

おほかたは霜と見れども雪かともいはねに白くかかる月かげ

寄鹿戀同

思餘りしかともな□て鳴きをらむ聲にも野邊をとひも來るやと

秋朝戀同

朝寐がみひきとどむべきかたもなし振りはなしたる秋の心に

秋 鶴同

はな摺にむらさきにはふ白鶴や萩さく野邊に立てるつばさは

菊映月重陽御會

隈なくもみがく白妙のまがきかな月と菊とのひかりかはして

寄神祝九月十八日神影供

手向せり道のさかえはよろづ代と神のめぐみを猶あふぎつつ

秋 色同月二十四日

すむ月に菊も紅葉もかがやきてげにくもりなき秋のいろかな

秋 香同

仁孝天皇御製

名も知らぬ草葉のつゆもかをりつつあまねき秋の野邊の明暮

秋 聲 九月二十四日

蟲も鳴き鹿も妻こふゆふぐれに猶こゑ添へて擣つきぬたかも

枯野霜 十月二十三日

よそほへばこれも花かと思ゆるなり枯るる冬野の草の上の霜

鶯 同月二十四日

降る雪のみ谷に春を誰れ告げて早くも來なく今朝のうぐひす

螢 同

玉ならで玉のひかりの玉だれに見えすくものは軒のほたるか

網 代 同

さながらに錦かけけり宇治川や氷魚と木の葉のよるの網代木

冬 戀 同

思ひせく涙のつらら解けかねぬひとり寐さむきふゆの夜床に

天 同

あふげなほ星のくらゐも日のかげも月の光もくもりなきそら

水郷 冬月 十一月二十四日

まろねする蘆屋の里の夜をさむみこととふ月の影もこほりて

雪中 千鳥 同

降る雪をいくへかけつつ友千鳥はねしろたへにうらづたふ聲

隔夜 逢戀 同

とことには契る夜もがな隔ててはあひ見るだにも心おかるる

柳 風 十二月十八日後院御鎮守柿本社御法樂

枝の雪をはらひつくして青柳のみどりのどかに靡くはるかぜ

東西 時雨 同月二十四日

ひがし山かかると見えし雲はれてまた時雨する西のそらかな

雲間 冬月 同

仁孝天皇御製

しもゆきにごほる雲間を洩れ出づる影さへさむき冬の夜の月

寒夜水鳥 十二月二十四日

住みなれし床も氷にさゆる夜と侘びて鳴くなるをしかもの聲

野 雪同

あらし山みねの嵐にやたの野はただしろたへのあけぼのの雪

歳中鶯同

やや近き春のとなりとあし垣の雪にきこゆるうぐひすのこゑ

弘化二年

春生人意中 正月二十四日御會始

年の名も廣くやはらぐ春なればわきてのどけき人ごころかな

初春鶯 二月十七日

谷の戸も春や立ちけむ告げねどもき鳴きて告ぐる庭のうぐひす

梅香留袖 同月二十二日水無瀬宮御法樂

さかりなる花の木かげに立ちよればあとまで深き袖の梅が香

立春日 同月二十四日

出づる日の影もかすみてこの朝け春たちにつける天の香具やま

夏月涼同

すすしさは夏とも更にいはいはしみづ月もみあれの秋を待つかけ

雁初來同

秋風の吹くとほたるや先告げて今朝はみやこに雁のきぬらむ

夕鷹狩同

狩りくらし小忌のころもと見ゆるまで雪にかへさの鷹人の袖

祈身戀同

ひたすらに身をこそ祈れ長らへば人に逢ふよの若もありやと

子 日 同月二十五日聖廟御法樂

浅みどり春のいろそふ小松原けふの子の日にひきはやせとや

花契多春三月十八日神影供

いろか添ふ高津の山のさくら花いくよのはるも神にちぎりて

春曙月同月二十四日

いひしらぬあけぼのの花の光をも添へて木の間に匂ふ月かな

雁別花同

なくなくも見おきて歸る雁がねはさすがに花の名残をや思ふ

暮春鐘同

花鳥のかへるをおくる聲かとして聞くもつれなきいりあひの鐘

花のたよりに四月二十四日

櫻狩はなのたよりにおく山のいほもたづねて今日は見しかな

さける卵の花同

月みがく垣根に咲ける卵の花はいとど白妙のいろもくもらす

はたおる蟲の同

野邊は今ちくさの錦かけてけりはたおる蟲のこゑもひまなく

しぐるる空を同

さびしさもまさきの葛くりかへししぐるる空をうち眺めつつ

あまの羽衣同

敷島のみちのさかえは幾千たび撫でむいはほの天の羽ごろも

朝霞同

春の色に立ちかはりけり昨日まで雪のみやまも今朝は霞みて

早苗多五月二十四日

豊年の秋のたのみも千町田にいまより見えてしげきわかなへ

五月蟬同

ほととぎす聲も五月の空にあけて木陰に蟬の鳴くはめづらし

名所夏同

橋姫のよるのおもひやなぐさめて螢みだるる宇治のかはなみ

初戀五月三十日

月日へて浮名たつよりうちつけに思ひそめぬる色を見せばや

行路柳六月二十四日

くりかへす柳の絲にひかれつつ過ぎがてにする春のみちのべ

夏草同

咲きまじる大和撫子はな見むとわくるも深き野邊のなつくさ

萩露同

露といへばただ白妙とおもひしに萩におけばか匂ふむらさき

寄月戀同

夜な夜なにこととふ袖の月ならばかげにもさそへひとの面影

嶋鶴同

よばふ聲もたみの島の島にきて見れば千代をしめたる春の友鶴

松下泉同月二十五日聖廟御法樂

すすしくも緑のかげをうつすなり清水はまつの下にながれて

七夕扇七夕御會

たなばたの今日の扇とかしてまし秋は名のみにうけもこそせめ

萩風七月二十四日

風の爲と軒端に萩は植ゑなくにかばかりいつかやどりとりけむ

鈴蟲同

驛路のこれぞしるべとふりいでて鳴くや鈴蟲の聲のさやけさ

戀契同

われも頼み人もなさけの言の葉はこれぞまことの契なりける

秋霜八月二十四日

秋はいまなかば過ぎゆくほど見えてかつがつ結ぶ庭のあさ霜

秋池同

仁孝天皇御製

秋風の吹き渡る音もみみなしの池は聞かずやすめるしらなみ

秋庭八月二十四日

八千種のはなにすさびてくるる夜は蟲の音めづる秋の庭かな

秋猿同

秋かせの吹くに亂るる木の葉猿このみをひろふ聲もあまたに

秋琴同

誰がかたのしらべなるらむ秋風のさそふも月にすめる琴の音

秋漸開重陽御會

ませがきに昨日は一重けふは八重さきつぐ花はながづきの菊

月前蟲九月十三日

いつよりもことにこそ聞け名にしおふ今宵の月に蟲の鳴く聲

曙鳴同月二十四日

ながき夜をなほ飽かずとや曙のつきにきこゆる鳴のはねがき

葛同

軒ちかき楓はあれど染めかけてまだひとしほの葛のもみち葉

市人同

うりかひのわざをしかまの市人やとよめく聲の絶えず聞えて

歎冬十月二十四日

かはづ鳴くこゑもはななる吉野川きしの山吹いまさかりとて

七夕同

明けやすきまだ初秋の一夜とはなどたなばたの契りおきけむ

時雨同

さだめなき物とはいへど冬みせて時をたがへず時雨ふるそら

旅戀同

旅ごろもきつつぞ思ふ故郷にいくよ馴れぬるつまはいかにと

述懐同

仁孝天皇御製

いつしかと三十年近くなりぬれど世をしるのみの身ぞおほけなき

月前霜十一月二十四日

白妙のひかりもことに見ゆるなり月すむ夜半の霜のまさごぢ

雪散風同

花ならば脈ひこそせめうちきらし風のまにまに雪ぞ散りくる

寄雲戀同

いざさらば雲とやなりて懸らまし思ふそなたに消えは消ゆとも

關路櫻十二月二十四日

鈴鹿やませき路の櫻いかにとてふりさけ見れば花ざかりなる

船中郭公同

浦遠く漕ぎゆく船をおくりてや聲たかさごに鳴くほととぎす

三日月同

山の端をいつか出でけむ暮るるよりはや中空にみか月のかけ

葦間雪同

枯れわたる霜のふる葉のあしのまにまた白妙を雪ぞ見せける

蹴鞠同

雪かかるかかりの陰にいさみつつ寒げにもなき庭まりのこゑ

孝明天皇御製

弘化五年(嘉永元年)

鶯有慶音 二月十八日御會始

鶯のこゑのいろにもあらはれでももよろこびの幾千代のはる

山 霞 同月二十二日水無瀬宮御法樂

花鳥ののどけき春のいろ見せてかすみぞなびく四方の山の端

朝 鶯 同月二十五日聖廟御法樂

梅柳いろめくはるの庭のおもに朝日まちえてうぐひすの鳴く

初春風 三月二十四日

ふる年の雪げの空にたちかへてやはらぐこゑの春のはつかせ

孝明天皇御製

卯 花 三月二十四日

月雪のひかりを見せて玉川のきしねつづきに咲ける卯のはな

子 日 四月二日

幾春も今日の子の日にちぎりおきて千代を祝はむ松の言の葉

新 樹 同月二十八日

はなちりて枝はみどりの夏木立しげる若葉のいろぞすすしき

待郭公同

ありあけの月にやなきし待つよひの心づくしの山ほととぎす

浦 浪 同

はるばると濱邊を見れば朝な夕なゆたかによする和歌の浦波

餘 花 五月二十四日

過ぎし春をなほしたひてや夏木立青葉がかげに花ぞにほへる

夕立雲 同

なるかみの音をへだててあま雲のよそに過ぎゆく夕立のそら

夕立過 六月二十四日

夕立はただときのまに過ぎゆきて日影うつろふ軒のたまみづ

納涼風 同

ゆふすすみ立ちよる袖に吹きかよふ風も秋なる杜のしたかげ

契變戀 同

すゑかけて契りおけども人ごころかはるぞつらきなかの年月

白梅盛 同月二十五日聖廟御法樂

さかりなる枝白妙に咲く梅はただつきゆきとまがひてや見む

織女契 久七夕御會

言の葉の契は千代の秋かけてためしひさしきほしあひのそら

秋 七月二十四日

秋きぬといふよりやがてなぐさむは花の千種や蟲のこゑごゑ

祝七月二十四日

神代よりをしへのままのあととめて榮ひさしきしまの道

秋 田 八月二十四日

霧はれし稻葉を見れば夕日かげさすもさびしき秋のをやま田

都 月同

名どころのながめありとも秋の夜のはなの都の月ぞことなる

園 竹同

わが友とそのふにちかく栽ゑおきて千代をみどりの吳竹の蔭

菊契多秋 重陽御會

松竹のよはひを契るためしあらば菊もいく世の秋やかさねむ

月契秋 九月二十四日

神代よりくもらぬかげを日の本にちぎりてむかふ秋の夜の月

山路菊同

斧の柄は朽つともつきじ菊の花山路に千代をちぎりてや咲く

冬月 冴十月二十四日

山風の吹くもはげしき霜のうへにひかりぞ冴ゆる冬の夜の月

寒草霜同

八千ぐさは秋みし色に咲きかへて霜の花にほふ冬のさむけさ

氷始結同

小夜ふかく冴ゆる嵐にこの朝けこほり初めたる庭のいけみづ

嘉永二年

禁中祝 正月二十四日御會始

九重のうてなの竹のみどりにも千代のはるたつ色ぞ見えける

子 日 二月二十二日 水無瀬宮御法樂

幾千代のためしちぎりて春の野にけふ子の日する松の言の葉

孝明天皇御製

立春雪二月二十四日

春たつと出づる日影はのどかにて風のこころに雪をさそはむ

隣瞿麥同

咲くころはめかれぬ色をながむらむ中垣へだつなでしこの花

若菜三月十一日

雪こほり解けし澤邊の若菜こそおのがはるぞと人に摘まれめ

山櫻遅開同月二十四日

春ふかきやよひの山をわけゆけばいかに櫻のおくれてぞ咲く

野遊至春同

あづさ弓こころひかれて春の野にゆふ暮までも遊ぶもろびと

江雨鷺飛同

降る雨にみの毛しをれてとしま江のみぎはをひろく渡る白鷺

初梅同月二十五日聖廟御法樂

春ごとにかはらずにはへ名にしおふ北野の宮の梅のはつはな

白梅四月二日

雪はきえ櫻ははやきこすゑよりおもかげ見せて咲ける梅かも

鶺鴒河同月二十四日

暮るるより月出でぬまをかつら川たばしる鮎に鶺鴒さしつる

紅葉同

露にそめ時雨にそめていくちしほ山は紅葉のにしきをぞしく

閏四月郭公後四月二十四日

かさなれる卯月のすゑの夕ぐれに忍音ながら鳴くほととぎす

垣根皆卯花同

枝たるる紅葉のいろの見えぬまで垣根にしろく咲ける卯の花

迅瀬聲如雨同

かはかせの早瀬の波の雪を今日ふりくる雨とまがひてぞ聞く

孝明天皇御製

春 月五月二十四日

咲く花にかげ見む月を春のそら幾重かすみの立ちへだてつる

神 祇同

天てらす内外のみやの宮ばしらいくよもさかえ神のめぐみに

夕 顔六月二十四日

垣根をば月のかげかともがひ見む夕顔咲けるはなのたそがれ

扇 風同

あつき日にたへかぬるよはいくたびかならず扇の風をたのまむ

夏 望同

なにはがた入江の夏に見わたせば蘆屋のさとの風もすすしき

蟲同月二十五日聖廟御法樂

天滿つる宮居にちかき松蟲はかれせぬこゑにいくよ鳴くらむ

二星逢七夕御會

いくあきも心へだてず契りおくふたつの星のゆきあひのそら

竹 鶯七月二十四日

うぐひすのおのがやどりの花もあれど竹の林の陰に鳴くなり

籬 菊同

しめゆひし籬えならず咲く菊の花のさかりをめでてこそ見れ

小鷹狩八月二十四日

花に遊ぶ野邊のちぐさのいろどりをなほ狩りくらす秋の鷹人

稻 妻同

朝顔のはなよりもなほはかなきは光とどめぬよひのいなづま

水郷秋同

宇治川やなみもてらしてすみわたる月よりかよふ秋風ぞ吹く

露光宿菊重陽御會

よろづ年けふの言葉と咲く菊にひかりかすある花の上のつゆ

萩九月二十四日

濃むらさき露のひかりをあやにして錦おりしく野邊の萩はら

吹きしをる今朝の野分にあれはてて露もみだるる花の草がき

庭落葉十月二十四日

こすゑには松よりほかの色もなく庭に散りしく風のもみぢ葉

寒草霜同

花をみし秋の千くさにおく霜のいろも寒けきふゆがれのころ

寄鳥戀同

我が中はとほ山鳥のいつまでか思ひへだてて逢ふ夜半ぞなき

花 盛十一月二十四日

待たれつるこころ忘れて櫻花さかりのかげを飽かずながめむ

水 鳥同

枯れてふすあしべ寒けき江の波にうかべる鴨の青羽をぞ見る

軒早梅十二月二十四日

ほどこかき春ましかねて霜ゆきの軒端にはほふ梅のはつはな

歳中鶯同

年のうちの春のひかりの玉松に聲さむからすうぐひすの鳴く

萬民祝同

千代しめて神のまもりの國なればよろづの民もさぞ仰ぐらむ

嘉永三年

毎春翫松梅正月二十四日御會始

咲く梅もちりうせすして色まされ松にあひおひの年年のはる

初 春二月十二日

はつはるの節にあふ庭にきこゆるは國栖の翁の笛たけのこゑ

孝明天皇御製

春日二月十九日

うちかすみ行くこと遅き春の日は老せぬ門の名にめぐらむ

初花 同月二十二日水無瀬宮御法樂

青柳の絲ながき日に待ち待ちて今朝吹きそむる花を見るかも

立春 同月二十四日

天てらす日影も今朝はかすみつつ神代のままに春の立つらむ

山餘寒 同

昨日今日また冴えかへり山かげの岩間の水はこほりゐにけり

二月餘寒 同

二月やうつろふ梅の枝かけてまた冴えかへりつもるゆきかも

ねの日 同月二十五日聖廟御法樂

霞たつ今朝春の野にともむれておなじ子の日の松をひくらむ

富士山 三月十一日

名にしおふ都大比叡かさぬともおよばぬ富士の山たかきかげ

絲 櫻 同月二十四日

佐保姫のはるの手引のいとざくら花の色香をくりいだすらむ

遅日 同

中空のかすみに影ややすらひて行くことおそき春の日ながさ

春 興 同

峯の花ふもとのつばなつくづくし心あかれぬはるにこそあれ

かきつばた 四月二十四日

から衣きつつとひにしいにしへを思出に咲くかきつばたかも

ふちばかま 同

深きいろの彌生に匂ふ藤ばかま誰がぬぎすてし名残なるらむ

め菖蒲 五月五日

めぐりくる五月五日の節はへて軒ごとに葺くあやめぐさかも

孝明天皇御製

右一首は「さつきいつかあやめをもてあそぶやまとうた」の二十字をわかちて、各初句の頭におきて、菖蒲の歌二十首をよめるうちに「め」の字をおきてよませたまへる御歌なり。

野納涼 六月十七日

かはほりの扇の風もたゆまぬや暑さかげろふ小野のゆふぐれ

春 夕 同月二十四日

さくら狩一枝手折りてかへるさの山路の春にむかふゆふづき

秋 鳥 同

もみち葉の色づく山の秋とへば霧をへだてて百舌の鳴くこゑ

名所雪 同月二十五日聖廟御法樂

天みつる神のみやゐの一夜松ゆきのしら木綿かけぬ日はなし

牛女悦秋來七夕御會

たなばたのこよひうれしく天の川流れてたえぬ秋をちぎらむ

秋はぎ 七月二十四日

あき萩のさかりを人の来て見よといはせの小野に錦おりしく

松むし 同

月のすむ浅茅が原の秋の夜に誰れまつむしの音にたてて鳴く

いはほ 同

動きなき姿みるよりさざれ石の巖となりしその世をぞおもふ

關郭公 八月九日

なれもまた昔おもふかほととぎす名のりて過ぐる朝倉のせき

夕 顔 同月二十四日

くるる夜はなほ月影とまがひみむ賤が垣根のゆふがほのはな

河 藻 同

河水におふる玉藻のかげこそは魚のあそべるすみどころなれ

相互思戀 九月三日

孝明天皇御製

わがなかは賤のをだ巻くるいとのかたよりならぬ思なりけり

菊花満庭 重陽御會

九重の庭のしらぎく咲きみちて千代のかすをや花に見すらむ

紅葉透霧 九月二十四日

ほのにはふ霧のすきまの薄紅葉おくに千入のいろをかさねて

紅葉勝花 同

花よりも立田の秋のたつた草はるにもまさるながめこそあれ

寄紅葉戀 同

わがおもひ磐瀬のもりのいはすとも妻戀草の名にやそむらむ

惜九月盡 同月二十九日

いつよりか一日もはやく暮れてゆくこの長月の名残をぞ思ふ

霜十一月二十四日

色さむきまがきの草の冬がれに今朝しろたへの霜ぞむすべる

霰 同

村鳥の羽かせにこほる雨なるか雪にもあらであられ降るなり

雪 同

晴間なくいくへつもるや吳竹のゆきに下折のこゑぞきこゆる

雪似波 十二月二十四日

河岸の降りつもりたる雪の色はさながら波のよするとや見む

雪中駒 同

駒なべてこころもはるる歸るさの道をば雪にたどるゆふぐれ

嘉永四年

春雪散風 二月十一日

梅かをり青柳かすむはるながら雪やいつまでかせに散るらむ

柳辨春 同月十六日

孝明天皇御製

雪に見し千すぢの絲は日かすへて柳のみどりはるぞ添ひゆく

若 菜 二月二十二日水無瀬宮御法樂

子の日せし同じ野に出でて摘む若菜猶千代契る春のことぶき

初 春 同月二十三日

百のつかさ民の家居も春にあけて營むわざどのどわかかなりける

待 花 同月二十四日

待たれつる櫻が枝をながめても咲くべき花のときはいたらす

花有遅速同

とく咲きて移ろふとても惜むなよあとにも匂ふ花のありけり

山早春 同月二十五日聖廟御法樂

天地にあまねく滿つる春たちて山といふ山はかすみそむらむ

春 色 三月二十四日

八重がすみ立つものどけく春のいろに柳さくらは錦おるらむ

春 香 同

散らすなところ厭へど春の風さそはねばこそ花のにははめ

春 聲 同

春しめて鳴くうぐひすや水にすむ蛙のこゑもこころやはらぐ

賀茂祭同

年ごとに絶えぬみてぐら鎗馬けふのみあれにかみもうくらむ

元 服 同

行末を千代に八千代と契るらむ初もとゆひの今日のよろこび

池 登 四月二十一日
孝明天皇紀

池水のみぎは涼しきひかりこそ玉藻にすだくほたるなるらめ

秋 河 五月二十日

秋かせもなほすみわたる角田がは月のひかりに都をぞおもふ

夏の田 同月二十四日

五月雨のふるの山田にうゑわたす賤が早苗のかずも知られず
たちばな五月二十四日

薬玉もそらだきものもよそなれや風にかをれる軒のたちばな
あひおもふ同

かぎりなく末もかはらぬ思こそひとへに深きころなるらめ
夏 里 六月五日

かやり火のたつるけぶりのほどほどに家居しらるる夏の村里
鶉河螢同月二十四日

鳥羽玉のよかはの鶉舟さすころに心ありけるほたるなるらむ
社頭祝言同

かけまくもかしこき神の宮づくり猶すゑながく榮ふためしは
櫻同月二十五日聖廟御法樂

櫻ばな咲きそめしよりなべて世の人のこころも春になりゆく

七夕薄 七夕御會

小車の牛ひくほしはいそぐとやつまうちまねく花すすきかも

月前星 八月二十四日

大空の星のやどりもたえだえに月のあたりはかげうすくして

浦 月同

名どころのいづくはあれどよる波も月に明石の秋のうらかせ

菊爲花第一 重陽御會

梅をはじめ花といふはなにまさりけり色香おいせぬ九重の菊

冬 天 十二月二十四日

冬はいましはすの月となりにけりしぐれし空も雪のやまかせ

冬 海 同月二十八日

沖つ風吹けどさわがぬ冬の海のひとつにこほる雪のしらなみ

冬 里 同

秋に見しうづらの床も冬枯れて今は名のみふかくさのさと

冬 祝十二月二十八日

霜おけどふゆがれ知らぬ松が枝は雪の中にも千代をふかめて

嘉永五年

春來日暖正月十八日御會始

この國は日の本なれば日かげより花うぐひすの春ぞ見えゆく

鶴契千年二月十五日賜大樹六十賀

ふかみどり松の大樹のかげしめてやどれる鶴や千代の友かも

初 春同月二十四日

雪はまだ降りてもさすがつもらぬに春の光はあらはれにけり

待 戀同

今こむと待ちつる夜半の横の戸に頼まぬ月のさしいるもうし

霞中鶯同月二十七日

春がすみいつも八雲の八重垣にのどけさこめしうぐひすの聲

柳帶露後二月四日

絲ざくら咲くかと思しは花ならでしだり柳にむすぶしらつゆ

嶺 霞同月二十二日水無瀬宮御法樂

朝日かげむかふ高根はかすみけり春のひかりに眉ひらけつる

春植物同月二十四日

萬木の中にすぐれしまつなれば春にいろ添ふかげもことなり

春動物同

百鳥のさへづる春になりにけり人のこころもはなにうつりて

春雜物同

よるまでも花にうつろふ月にめでこの下陰にめぐるさかづき

戀 燈三月二十二日

孝明天皇御製

物おもふ我が影さへも人やくとまよふはつらき闇のともし火

ふ ち三月二十四日

咲く藤の花のしらなみよせかへり吹く春かせにかかる松が枝

や ま同

これぞこの國のはじめの山といふ山はいづくぞ淡路しまやま

曉聞鶯 同月二十五日聖廟御法樂

うぐひすの花のねぐらやしらむらむ夜深き窓に聲のきこゆる

花似雲 同月二十八日

よそにのみ見てや過ぐさむ匂はずばあだに櫻を雲とおもひて

杜神樂 同

杜ふかき神の御前のさかき葉にしらみて明くる朝くらのこゑ

新樹露 四月二十一日

夏ふかくしげり添ひなばうけれども今の若葉の露はすすしも

新樹風 同月二十四日

今はただしげる若葉のよわければ吹き通ふ風に靡きがちなる

面影戀 同

身にそふるその面影のまことならば花月よりも嬉しかるらむ

山家鳥 同

世はなれし深山の庵の住居には待たでも聲を聞くほととぎす

山家煙 同

眞柴たく煙たつにぞ住む人もありと知らるるやまかげのいほ

寄龜祝 同

聖なる道しることも龜なればよにたのみなきものところ思へ

蟬 聲 六月二十四日

さりざりす草葉にすだく思をもなつはこすゑの蟬のもろこゑ

泉 同

孝明天皇御製

あすもこむ山したかげの岩清水むすぶ手さへに月やどりけり

緑 松 六月二十四日

萬代もとはにさかえむみかさ山たちならぶ松の深きみどりは

夏 河 同月二十五日聖廟御法樂

いしかはや瀬見の小川の夏すすしながるる水に月ぞやどれる

月 七月二十四日

いづかたもこころにめでて眺むるや天つ雲井の月のひかりは

忍 戀 同

火をしたふ蟲の心もおもひしれ音に立てずして忍ぶ我が身は

寄 菊 祝 重陽御會

田鶴の住むたみの島の島に咲く菊はやがて千歳を我が物にして

早 涼 至 九月二十四日

あつき日は秋くることを待ちながらさらに驚く今朝の涼しさ

松 間 紅 葉 同

よそめには時雨にもるる木木ぞなき松も紅葉の色にうつりて

霧 中 山 十月二十三日

旅衣とほざかるほともはるばると分けこし山を敷へてぞ知る

松 上 霜 同 月二十四日

雪にしもまづさきだちて白妙に松の葉さむくおけるあさしも

湖 千 鳥 同

ささなみや志賀の浦わに鳴く千鳥松風さむみこゑしきるなり

不 言 戀 同

おもふこと打出の濱のうちいでず松吹く風のおとばかりして

折 花 十一月二十四日

さくら花われに折らせよ幾木あるただ一枝はさのみをしまで

河 冬 月 同

孝明天皇御製

こほりゐて流れもあへぬ川波にうつろふ月のかげぞさむけき

早 春十二月十五日

世は春のこころの色にやはらぎて松風かすむすみよしのうら

早 梅同月二十四日

としのうちの嵐いとはで咲く梅はさながら花も雪かとぞ見る

埋 火同

雪折の寒けき音もうづみ火にむかふ我が身はおぼえざりけり

冬 祝同

豊年のためしかさねて降りつもる雪をみぎりのまつの言の葉

家家七夕七夕御會

ほしは今日ひとつにうけよ家家のその人人のかはるねがひも

嘉永六年

松契春正月二十四日御會始

敷島のつきせぬみちは松が根の苔むすまでとちぎるはるかな

霞中鶯同月二十八日

うぐひすのありとやここに聲はして見えぬはふかき春の霞か

春曉月二月十四日

咲くうめのあたりも月の夜をこめて霞の中にあけのそら

春朝日同月二十二日水無瀬宮御法樂

天のはらふりさけ見れば朝日影かすむも飽かぬ春のいろかも

早春風同月二十四日

花鳥のいろ香をまだきいそぎてや雪げやはらく春のはつかせ

蘭同

よりにて見む薄むらさきの藤袴ぬぎすておきしぬしは知らねど

名所鶴同

孝明天皇御製

和歌の浦や常磐の松のしたかげに千とせをこめてすめる友鶴

若菜二月二十五日聖廟御法樂

春さむみ雪はあれどももえにけり若菜もおのが時をたがへず

社頭月三月十七日

ところから影すみよしのかみがきや月にはかかる雲霧もなし

雲雀揚同月二十四日

空にいま鳴きてあがるとながむれば聲のみきこゆ夕雲雀かも

摘堇菜同

暮るるまで摘めども飽かぬ堇草野をなつかしみ今日一夜ねむ

田家水同

せきわくる門田の水はかすみけり賤が家居ものどかにぞ見ゆ

郭公四月二十四日

待つと知らば卵の花がきに鳴けや鳴けいま時鳥五月こすとも

夏 草同

秋の来て花咲くまでは名もわかじひとつ緑の野邊のなつぐさ

夕立同

雲かせの空はげしくも夕立の降るかと思ればよそに過ぎゆく

冬植物五月十二日

冬のきて濃きむらさきの霜の菊うつろふ色もまたあかす見る

五月雨同月二十四日

今日いく日降る五月雨に音羽山おともまさりておつる瀧なみ

窓 螢同

集むると人や見るらむ窓のうちをおのれとあまたてらす螢も

夏眺望同

和田の原八十島かげは夏の日もよそめ涼しくかよふつりぶね

春 河六月二十四日

芳野川はな散る後をやまぶきはおのが春べと咲けるきしかげ

夏 木六月二十四日

六月もなかば過ぐればおのづから吹く風すすし檜のしたかげ

戀 色同

うつりやすき花田の色の摺衣つゆむすびてもかひぞなからむ

寄木契戀 同月二十五日聖廟御法樂

やどり木のやどるばかりの中にしもつらなる枝の契かはさむ

七夕筆 七夕御會

秋のきて今日言の葉をかく筆はおのづからなる星のたむけか

秋 雨 八月二十三日

眺めつつ思ふも淋し秋の雨の降るがまにまに木の葉ぬれけり

薄 滋 同月二十四日

こと草のあるがなかにもみだるるは薄にのみや秋かせの吹く

初 雪同

山かげは松の葉しろくつもりけりみやこそ今朝を初雪のそら

淵 龜同

淵よりもふかしやふかし住む龜の萬代たもつおのがよはひは

煙 九月八日

朝な夕な民のかまどのにぎはひをなびく煙におもひこそやれ

菊匂留袖 同月九日

うつるてふにほひもふりぬ菊の袖千とせの秋を花につみつつ

浦擣衣 同月二十四日

うらかせの夜さむの月を友として衣うつなり須磨のあまびと

暮秋野 同

あはれさもいはむ方なし秋ははや暮るる野もせの草のうち哉

寄河雑 同

千代よろづ神の恵のいつまでも絶えずながるる五十鈴川なみ

春日野十月二十四日

春がすみ春日の山にたなびきてふもとの野邊は若菜をぞ摘む

清見關同

たちこめし三保の松原きりはれて清見が關にすめるつきかけ

鏡山同

志賀の浦も浮き立つ雲のしぐれけり鏡の山は晴れくもりして

寒月十一月二十四日

秋といへど中中はぢぬ冬の夜や霜にみがけるつきのひかりは

氷同

冬くればいづこの瀬瀬も冴え冴えて音無川とこほりゐにけり

戀書同

世の中の人はそのれともえぞ知らぬ忍ぶこころの露のたまづさ

朝雪十二月二十四日

この朝け降りつむ雪は鳥羽玉の夜半のあらしの名残なるらむ

社頭雪同

國民のやすきを祈るかみがきにかけてぞなびく雪のしらゆふ

雪中鶴同

つもるともつもらずとも雪の色をおのが翅の鶴の毛ごろも

嘉永七年(安政元年)

春山成興正月十八日御會始

おもしろや霞に春をそめなして咲かぬさくらもみ吉野のやま

寄神祝言三月十一日神宮御法樂

言の葉のたむけうけてよ國民のゆたけきことを神もおもはば

名所鶴同

孝明天皇御製

朝づく日さしそふ影も伊勢の海のきよきなぎさに立てる友鶴

立 春三月十五日石清水社御法樂

天の戸のあけてのどけき朝日かげ八幡のやまに春はきにけり

杜 月同

枝繁き杜のこずゑもさやかにや月のかつらのひかり添ふらむ

霞映日 同月二十一日内侍所御法樂

千早振神代のはるの立ちかへり日影うららにかすむそらかも

松 藤同

散りうせぬ松をはふ木に契りつついつより咲くか藤波のはな

社頭鶯 同月二十二日鴨社御法樂

春のいろは今ぞやはらぐ神垣にうぐひすうたふ聲ものどけし

雪中梅同

降る雪を花にかさねて梅が枝のいろはわかれず匂ふはるかせ

冬 夜同

鳥羽玉の夜すがら冬のさむきにもつれておもふは國民のこと

夏 川同

世を祈るころは神もくみ知るや賀茂の河原の夏のすすしさ

子日松 同日水無瀬宮御法樂

千年へむ春のためしもかねてより子の日の松に契るゆくすゑ

松残雪 同月二十五日聖廟御法樂

いつまでも吹く春風の冴ゆるにや松のこずゑは雪ぞのこれる

柳 六月十一日神宮御法樂

うちなびくやなぎの絲のすなほなる姿にならへ人のころは

難波江同

津の國のなには入江はなつすすし葦のむらだち風わたるなり

花爲春友 同月十八日鴨社御法樂

今日いくか飽かぬ心の友として花もてはやすはるのもろびと

池月似鏡 六月十八日鴨社御法樂

池の面に照る月影のくもらぬは人のころのかがみなりけり

初戀同

袖の露いろに出でつつ物思ふころのうちをいつか知らさむ

葵露同

つゆかかる神のめぐみにあふひ草いく世ふりせず緑そふらむ

夏海 同月二十一日内侍所御法樂

沖つ風吹きはらひつつ波のうへはゆたに涼しき夏のうなばら

寄都祝言同

かしこくもとの都にかへりくれば猶する長く神まもりてよ

夏瀧 同月二十五日聖廟御法樂

水無月の暑きひるまもなかなかに涼しくおつる瀧のしらなみ

社頭夏 同月二十八日石清水社御法樂

繁る木に照る日をよきてまもります八幡の宮居なつも涼しき

山家松風同

年を経てこの山住のあけくれに松吹くかせもいまは馴れつつ

七夕月 七夕御會

夕月夜ほのめく今日のわたりせに船出をいそげほしあひの空

秋名所海 七月十一日神宮御法樂

伊勢しまや磯邊の月に見わたせば海ばら清くかよふあきかせ

月前郭公同

あしびきの山ほととぎす幾聲ももらすや月のかげにうかれて

夏地儀 同月十二日鴨社御法樂

水鳥の青羽のいろのなつ木立うつるすすしき今朝のかはづら

夏植物同

孝明天皇御製

言の葉のとはにさかゆるしるしかは大和撫子はなもみだれず

離 菊七月十五日石清水社御法樂

久方の月と星とおもかげもまがきに見せて咲けるしらぎく

春 霞同

八幡山ふもとへだてず霞みつつ吹く春かせものどかなりけり

春 雪同月二十一日内侍所御法樂

あまつそら霞のひまに散りくれば雪もさながら花のおもかげ

榊 雪同

うたひつつとる榊葉に降るゆきは神のこころの白にぎてかな

早涼至同月二十四日鴨社御法樂

唐ごろも瀬見の小川にすすしさもまだきおぼゆる秋のはつ風

新秋雨同

秋はただ桐の一葉に見えそめてさびしくおつる雨のこゑかな

磯千鳥後七月十一日神宮御法樂

風たえて波こゆるぎの磯千鳥しづかなる世を告ぐるこゑかも

霞をわけて同月十五日石清水社御法樂

しきしまや大和島根の春風にかすみを分けてのぼる日のかげ

秋 田同月十八日鴨社御法樂

豊としと思ふも神のめぐみかや御としろ小田の秋の穂なみは

欸 冬同

蛙なくこゑをしるべに來て見ればいまぞさかりの井出の山吹

寄竹祝同月二十一日内侍所御法樂

行末はすぐなる竹のふしのまも世のをさまりを神にまかせつ

名所萩八月十一日神宮御法樂

宮城野の萩がはな見む笠なくて我がころも手は露に濡るとも

河邊月同月十五日石清水社御法樂

秋こよひ生けるをはなつ川なみに月もながるる影のうつりて

仲 春九月七日鴨社御法樂

二月の空しりがほのつばくらめ來るや野もせに雉子なくこゑ

秋色同

萩が花いろそふ頃の露にしもいそぐは染むる木木のみち葉

籬菊如雪 同月九日

眞白にも見ゆるまがきは咲く菊の花かあらぬか雪のおもかけ

落 花 同月十一日神宮御法樂

神風や神のところに吹きはらひ散るはさくらの花にしるしも

水上秋深 同月十五日石清水社御法樂

嶺の松ふきかよふ風にすみぬるはこや秋ふかき淀のかはみづ

雲收月明 十月九日内侍所御法樂

空みれば雲はれわたる雲のうへに月のみやこの月のくまなさ

初 冬 同月十一日神宮御法樂

立ちかへる春の面影まづ見えて冬にもゆるき山おろしのかせ

山 同月十五日石清水社御法樂

四つの時くもらずてらす月も日もあさなゆふなの道は山かな

冬 雜物 同月十七日鴨社御法樂

北祭ややほどちかしあづさ弓をさまれる世のふえたけのこゑ

冬眺望同

雲霧のころづくしの秋すぎて冬しづかなるやまの見わたし

夕 戀 同月二十一日内侍所御法樂

かねてより契りおきてし夕ぐれは心にかかるささがにのいと

雜 木 同

柚山やなほき檜はらに宮木ひく神のめぐみのとのづくりせむ

菊交薄 同月二十三日鴨社御法樂

うちなびく尾花が袖のぬひものかいろとりまじへ咲ける村菊

渡紅葉十月二十三日鴨社御法樂

棹さすや大井のかはのわたしもり秋は紅葉のにしき着つつも

秋神祇十一月十一日神宮御法樂

言の葉を千木の千度もかさねつつ神にたむけの秋のみてぐら

歳中梅 同月十五日石清水社御法樂

白雪はまだふるとしのこすゑより思ひがけすもにほふ梅が香

寒月照霜 同月二十日鴨社御法樂

霜もつき月もしもよりみがかれてむべ白木綿をかくるかみ垣

河邊千鳥 同

かたをかの森の月影さゆる夜は千鳥なくなり賀茂のかはづら

梅 同月二十一日内侍所御法樂

あまつ日の光うららになりにけり今ぞはるべと咲ける梅が枝

初春鶯 同月二十四日

春くると誰れにとはでも鶯の鳴く音よりこそまづ知らせけれ

寄世祝言 十二月十一日神宮御法樂

伊勢の海やまさごの敷をかぞへつつ治まる世世の例にぞせむ

湖上雁 同月十五日石清水社御法樂

ささなみや志賀の濱松いくちとせ契りてわたれ秋のかりがね

寄地祝言 同月二十一日内侍所御法樂

かみわざの天のみほこの雫よりなりにし國ぞすゑはひさしき

風前雪 同月二十七日鴨社御法樂

雪といへば風の心のままなれや空にひまなくなびき散らすも

雪上月 同

みそなはず神のひかりは月のかげ降りつむ雪の上に照りつつ

水樹多佳趣 後七月二日

孝明天皇御製

うごきなき千年のやどの池みづにながき榮をうつすときは木

秋 興後七月八日

いはまゆく水にも秋の色みえてながめぞまさる庭のおもかも

秋 聲 同月十六日

ここもなほ同じすゑぞと春日野の秋にかはらす蟲の鳴くこゑ

草露如玉 同月二十七日

龍田姫かざしの玉も今日ここにみがきて見する草の上のつゆ

秋風入簾 同

千千のあき松吹く風や玉すだれたけにちぎりて通ふこゑかな

冬 雲 十月二十九日

のどけしな今日は時雨もなかなか名だたるはるの雲の姿は

冬 苔 同

冬がれのころをよそにや苔むしろ知らすがほにも緑ふかむる

寒 松 十二月二十三日

かささぎの霜の橋ならで寒けくも松てふ松にかせわたるなり

冬 月 同

冬の夜や残れる雪を月かけと見るにもおそき今日のいでしほ

祝 言 同

よばふなり立ち並ぶ木に吹く風もむべこの殿の千代の行方を

絲 櫻 二月十四日

絲櫻はるの手引のながき日もくりかへし花のながめ添へつつ

春 懷 同

皆人のこころも花のひもとけてへだてぬ中のはるのさかづき

花映日 同

咲く花に空もかすみて香に匂ふ日かげのどけき春べなりけり

翫 梅 三月四日

めかれせぬ梅のさかりはいはで知れ花の後なる春のわか葉も
惜花 三月四日

散らすもあれ花は幾春かはらねど今年みはやす我れを思はば
嶺月同

こころあての空に光をにほはせて嶺さし出づる秋の夜のつき
時雨同

いづこにも冬のならひの村しぐれあらさだめなの雲の徂徠や
浅雪同

草木にはさすがに雪と見ゆれども降るほどわかぬ庭の真砂地
疎戀同

あまりうき同じ心のあらずともかくうとまれてすこす月日は
夕野遊 同月二十四日

ながき日も入野のすみれ摘みはやし心にをしむゆふぐれの空

簾外燕同

吹かぬまも馴れてぞきぬるつばくらの羽風にうごく玉簾かな
杜若同

春のいろをふかめてや咲く杜若みぎりまちかき水のながれに
郭公過 五月九日

あさくらや木丸殿にあらずとも名のりて過ぎよ山ほととぎす
寄瀧戀同

見し人を音にも聞かせよそならじつづみの瀧の名にし流れば
水郷柳 同月二十八日

霞たつ都のうちのかはづらや波かけてなびくあをやぎのかけ
五月雨晴同

日のかげを待たれ待たれし五月雨は今ぞはれまの天つ空かも
池鳴同

池の波みぎはは遠くなりゆきてこほりの上にかもぞ鳴くなる

神樂五月二十八日

うたふなる星のひかりもほのぼのと雲井にきこゆ朝倉のこゑ

澗戸鳥歸同

鳴く鳥はこころごころに歸るらむ日もゆふ暮の谷のやどりに

述懷依人同

深き淵うすき氷のいましめに日に我が身をかへり見つつも

海上夏月六月十七日

夏の海の波にみがける影みせて見る目すすしやこのごろの月

夕納涼同

立ちならす梢の風のすすしさも袖におぼゆる今日のゆふぐれ

家家納涼同

宿ごとに誰れも端居の夕すすみすすめばかよふ風ぞおぼゆる

夏草露同月二十九日

夏草のしげるかたよりおきそむる露は秋とも見するいろかな

寄燈舊戀同

ともし火の影も涙にくもりけり身はふることを思ひつづけて

岸頭待舟同

はるばるとむかふそなたの渡舟我が待つ岸のかたによせなむ

雁不忘秋七月二十三日

花の春みやこ思はずかへる雁も秋はこし路をよそに來ぬらむ

野分朝同

あらしつる野分のために朝顔はおもはぬ垣のほかにもだれて

紅葉秋深同

この頃は色なきかげもなかりけり紅葉に秋のふかさ知れとや

志賀浦八月七日

孝明天皇御製

浦風に花は散りけり志賀の海や波のうへにもいろ香うつして

蘆屋里 八月七日

なには女のかづく袖笠かすみけり蘆屋の里のはるさめのそら

吹上濱 同

ときしもあれ春めくそらの浦かせに吹上の濱は花のしらなみ

泊瀬山 同

うちつけにさびしき秋を泊瀬山をのへのかねの音に告げつつ

龍田山 同

あき霧は龍田のやまの下紅葉こすゑしぐるるいろなつつみそ

佐野舟橋 同

かみつけや佐野の舟橋かけつつもただいたづらに戀渡るらむ

停午月 同月十六日

吳竹のすぐなるふしぞうつりける月は午にもかけのむかへば

月前霧 同

雨雲のさはりがちなる月なればよし秋ぎりの立ちのぼるとも

杜 月 同

くもれどもさすがいさよふ月なれや杜に光のしばし見えつつ

徑 月 同

門出してうかれつつゆく秋の夜や月みるひとの徑のにぎはひ

瀉 月 同

ところから月すみよしの浦風にまぎれず見ゆる淡路がたかな

月前鹿 同

茂る木に深山くらしと小男鹿は出でてや野邊の月に鳴くらむ

晚鶯入霞 同月二十八日

うぐひすのねぐら尋ねて分けいるや霞むそなたの夕暮のこゑ

野徑雲雀 同

野路ゆけばあさる雉子の聲のみかうららにきこゆ夕雲雀かな

河上郭公八月二十八日

五月ぞと音羽の川の音に立てて名にあふさかの山ほととぎす

秋忍戀九月二十日

萩のかせ萩のした露うら枯るるころにも色を見せぬそでかも

秋庭同

おもしろき庭の山にも四方やまの秋の景色をうつす今日かな

秋衣同

あきくさの咲けるかたへに牽く駒や花のかざりの衣きつつも

稻荷詣同月二十八日

稻荷山すぎのした道にぎはふは今日はつうまの詣でもろびと

桃花同

春がすみ立ちかくしては薄く濃き桃の花てふいろに見えけり

佛名同

天つ日にむかふる雪とおのづから唱ふる御名に罪もとけなむ

隔月戀同

あひ見ての後の心のつれなさに月へだてても戀ひまさりけり

泉郎同

貝ひろひめかり鹽やきいとまなみこれも世渡る蟹のなれわざ

翫紅葉十月七日

玉の臺たましく庭とことさらによそふや木木の紅葉するより

紅葉盛同

もみぢ葉は秋よりかけて神無月いまはた色のさかりなるかな

露染紅葉同

露はもみぢ紅葉はつゆを染めなしてしろ紅とともにいろどる

暮紅葉同

孝明天皇御製

下枝よりや見えわかず紅葉ばの梢のいろもいまぞ暮れゆく

池紅葉十月七日

木木よ木木もみぢするより池の面の水また水も色に染めけり

紅葉留人同

もみぢ葉のあかぬ餘に思はずもしばししばしと時ぞうつれる

紅葉如錦同

染色も木木によりつつかはれるは都のにしきこれかとぞ見る

安政元年の御製とてものに見えたる孝明天皇紀

あさゆふに民やすかれと思ふ身のころにかかる異國のふね

安政二年

霞添山色正月十一日神宮御法樂

神路山かすみにつつむよろこびを猶やすき世の春に見すらむ

陽春布徳同月十八日御會始

天地のよろづの道のなれるよりつれていろます春やいくはる

氷解同月二十一日内侍所御法樂

谷川やうちいづる浪も花と見む春のひかりにこほり解けつつ

正月島津齊彬にたまへる寄國祝孝明天皇紀

武士もころあはして秋津洲のくには動かすともにをさめむ

初春山二月九日

立ちそむる春のしるしも三笠やま松吹く風のことゑにこもりて

安政二年きさらぎなかの四日かねて約し置き

たる近衛の亭に行きむかひ名にしおふ絲ざく

らを見て孝明天皇紀

昔より名には聞けども今日みればむべめかれせぬいと櫻かな
見れどあかぬ風をすがたの絲ざくら花のいろ香は長長し日も

おのづからこころも花に匂ふまでいとに櫻の咲きつづくころ
 青柳の千すぢの絲に香をこめて咲くかとおもふ花のいくもと
 いとざくらいと長き日もくりかへし風のまになびく花房
 午の時ごろよりときどき雨ふりければ
 これもまた飽かぬながめとなりてけり櫻がいとにかかる春雨
 絲ざくらいとよりかけて降る雨に花の色香も添ふここちせり
 またまた雨は晴れて日かげも花の上に照りそ
 へば

村雨の晴れ行くあとに春の日や花のひかりをみがき添へつつ
 春雨の晴れゆくあとの絲ざくらかすそふ花やつゆのしらたま
 黄鳥小蝶など花にたはむるもまた興ありて
 花の香をめづるころかいと櫻いとのかにもあそぶ小蝶は
 絲ざくら枝づたひするうぐひすのおのが羽色は若葉とも見ゆ

咲きつづく花の色香をしたひてや絲にみだるる春のうぐひす

夕景にも成りぬれば酒のたぐひとりかはし今
 日はめづらしく男方を召し寄せ花の宴もよほ
 さすときに右のおほい臣より數數儲物ありけ
 れば喜のあまりかくぞ有りける

花の時あふてふさへも嬉しきをこころづくしの人のなさは
 高坏に菓子肴物など盛りありその取合松藤の
 作物ありけるを見て

今日ここに千代を重ねてたつ松に契りてめぐれ春のさかづき
 松藤のたてるすがたをたねとして言葉の花も咲きさかゆらむ
 夕景にもなりてなほさら空もよく晴れ日影も
 うつろひし氣色またたぐひなければ

花のうへに夕日のかげのうつろひて更にいろます庭の面かな

日の影はをさまる頃の花の上をさらにてらして出づる月かな
色みえぬたそがれ時の花の上にはほのめきわたる今日の月かけ

おひおひにぎにぎしく盃もへだてなくめぐり
て

やはらぐる人のころも花ゆゑと猶よをかけて廻るさかづき
とく暮れて月もひかり添ひさやかに花をてら

す氣色またたぐひなくおほえつつ

けたれけむ春の夜ながらかすまぬは月もさくらの花の色香に

まことに雪月花ひとつの氣色のおもしろさに

雪とのみこすゑに花の咲く色もみがきそへたる月のかげかな

それより庭へ下りたち木の本に打ちつどひて

このもとにうちつどひつつながめても心の花の色はにははず
月のかげ花のひかりもいやまして春とは見えぬ庭のおもかな

おもしろやさすさかづきに影みえて月もかすまぬ花の下かげ
なにごともおもひ忘れて月のかげ花の色香をさらにめでつつ
雪かとも見ゆるばかりに咲きみちて庭にいろそふ花の上の月

またもとのところへかへりつつ盃のめぐるあ
まり人人手折りし花を冠にかざす我れにも右
のおほい臣のかざして

盃のめぐれるままに庭ざくら手折りしはなを我れもかざしつ
袂にもほひとどめむ手折りつつ花をかざして歌ふみやびと
何かとながき酒宴になりぬるほどに

歸るべき家路わすれていつまでも花にめぐらす春のさかづき
ほどなく警固も揃ひぬれば名残をしくもかへ
らむとて

いつまでも何忘るべきこの殿の花さくら木の今日のながめは

名残あれや飽かぬ心を木の本の花にとどめてかへる夜のそら
安政二乙卯年仲春仲四日於陽明家感花宴面白慶悦
之餘詠之 百二十二代孫御名

梅 風 二月十五日石清水社御法樂

うちむかふ庭木ならぬもこの頃は風にかをるやよその梅が枝
いとはやも賀茂のやしろの神がきに霞ぞ春のひかりこめつつ

早 春 同月十六日鴨社御法樂

雪こほり春のひかりに解けそめて今こそ水もおとまさりけれ

春 水 同

かすみそめし春の光は水無瀬川水のまにまにありてゆくらむ

初 春 同月二十二日水無瀬宮御法樂

年はいまひと夜の松に明けそめて春のひかりも天みつるかみ

初春松 同月二十五日聖廟御法樂

若 草 同月二十八日

大空のみどりの色にもえ出でてまだうらわかき春のわかき

寄海春 三月十一日神宮御法樂

なみまにも春のかひある櫻貝みるめのどけき伊勢のうみづら

花 盛 同月二十一日内侍所御法樂

明日はいかに今日を盛よ昨日まだ見ざりし枝の花もひらきて

名所歎冬 同

いかだしの棹やふれけむ大井川すぎゆくあとも靡くやまぶき

早 春 同月二十四日

佐保姫もおのが時きぬ春なれやかすみかさねしころも手の森

曉 霧 同

やまどりの尾上へだてて夜をのこす霧にをぐらき有明のそら

洲 鶴 同

孝明天皇御製

うちよする浪をつばさにかづきつといとど白洲のつるの毛衣

首夏鶯四月十五日石清水社御法樂

古巢には歸らでぞ鳴くうぐひすや夏きぬる後も春をしみつつ

夏隣同月二十一日

すみなすも軒端つづきの近となり隔てぬ夏のかせかよふらむ

若竹同月二十四日

卯の花の垣とやならむ竹の子の生ひしなかばに若葉さしつつ

朝葵同

あさづく日かざしの露のたますだれかくる葵の色もすすしき

浦鶴同

みつしほに蘆邊をさして友鶴は浦のひがたやとひわたるらむ

社頭新樹同月二十九日鴨社御法樂

神まつるころよりもげに夏木立あすは五月としげるひろまへ

河卯花同

みたらしや神垣ちかき河浪に咲く卯のはなのゆふかけてけり

夏色五月十一日神宮御法樂

夏はただ青葉のみならぬ色みせて小百合撫子はなも咲きけり

中殿小御所障子の色紙和歌の御製

五月十二日
孝明天皇記

音羽山弘徽殿

霞み渡りたる高嶺に朝日のどかに出でたり

あらたまる春のひかりに出づる日の音羽の山は霞みそめつつ

小鹽山萩戸

峯ふもと小松に雪のつもるところ

小しほ山ふもとの雪に見わたせばひとつにしろき峯の松ばら

伊勢海藤壺

孝明天皇御製

浦なみ寒き月に千鳥たつ鳴くもあり

伊勢の海や冴ゆる波間の月影にところ馴れつつ千鳥なくらむ

玉河里 鬼問

河そひの里の垣ねに卯花咲きつづく

しろたへの浪にうつして玉河の里の名みがくかきの卵のはな

住吉浦 朝餉

浦近く菊さきて霧の松陰に鳥居もみゆる

住吉と聞くも千とせのさかりをば浦わの松にちぎりてぞ咲く

元日節會 小御所上段

豊樂殿の臺盤に宮人つきみて庭上立樂の

體またはるかに祿の辛櫃の立てるも見ゆ

新玉のとしのはじめのよろこびを臣にかさぬるひろはたの絹

芳野山 同上

花ざかりのところ

散もせず咲きものこらぬ盛をばいくその春にみよし野のやま

蟲えらみするところ 小御所西廂

八千種のはなすり衣いざやきて嵯峨野に秋のむしえらばさむ

早苗多 五月十五日石清水社御法樂

八幡山ちかき鳥羽田にとる早苗しげきも神のめぐみとぞ思ふ

夏夕風 同月二十一日内侍所御法樂

涼しくも松にこゑして吹きかよふ風こそなつのゆふぐれの空

巖 同月二十三日

波にかくれ目に見ぬほどの沖の石も巖となれば人の知りつつ

郭公數聲 同月二十四日鴨社御法樂

うちも寝す待ちしにかへて郭公いまは夜ごとの聲のひまなさ

孝明天皇御製

螢過水上五月二十四日鴨社御法樂

賀茂川や水のまにまにひかりをもうつしとどめず行く螢かな

薄暮村雨六月七日

咲きいづる色もをぐらき夕顔の花につれなきむらさめのそら

深夜月同月十五日石清水社御法樂

浮雲のをさまれる夜にすむ月は更けて静けきかげのくまなさ

衣手寒し同月十八日鴨社御法樂

雪霜は草木をしらく見せにけりころもで寒しふゆのまにまに

松と竹との同

いつまでも面がはりせぬ世のすがた松と竹との立ちさかふ影

夏 朝同月二十四日

明けぬると思へば木木にきこゆる蟬の聲より朝日さすなり

夏 鶯同

夏河のみなそこ見つつある鶯やあそべる魚にこころとどめて

夏 舟同

なつはただ水ゆく岸に舟よせて涼しきままに綱も解きあへず

秋 草同月二十五日聖廟御法樂

あきかせの萩の上葉に吹きしより花のいろ見る千くさ百くさ

鳥鵲成橋七夕御會

かささぎのよりあふ羽のおのづから星のわたりの橋となるらむ

草花告秋七月十一日神宮御法樂

かつ咲けるかやを見しより秋はこの千種の花の上にかくれず

初秋風同月二十一日内侍所御法樂

秋きぬといろに見せつつ吹く風やはつほのすすき萩の上葉に

萩同月二十四日

なにに吹くも秋は淋しき風の音をまづ萩の葉の上にかこちて

露七月二十四日

秋もまた文月のすゑの草木にはおくしらつゆの敷そはすして

鹿同

秋田もるあたりの萩は咲きにけり庵とひがほに鹿や鳴くらむ

松間月八月十五日石清水社御法樂

松たかき枝にかけたるますかがみ曇らぬつきは神のみかげか

瀧邊月同月十九日鴨社御法樂

瀧のいとのうちもみだれぬ世のすがた神の教の月とこそすめ

寄月懷同

よもに知れくもらぬ秋の月なれや神代かはらぬ影あふぎつつ

夕 蟲同月二十三日

こずゑにはねぐらを鳥の聲よりも草根の蟲のゆふかけて鳴く

松 蟲同月二十四日

まつむしは秋のならひも白露に千代のしらべの聲を立つらむ

寄刈萱戀同

秋風にしどろもどろに刈萱のみだれてばかりものをこそ思へ

秋 山同

花に見しおもかげよりも秋山はいろどる木木の陰あかずして

菊粧如錦 九月九日

うつし栽ゑしむべ菊なれば唐錦やまとしきも花にこそ見せ

秋 獸同月十一日神宮御法樂

宮木ひきし牛はたゆみて秋にいま駒こそいさめ神のめぐみに

寄秋山望 同月十五日石清水社御法樂

松かせもむれゐる鳩のこゑまでも静けきあきの八幡やまかな

霧隔行舟 同月二十一日内侍所御法樂

こと國の船も見わかすへだつるは神のこころの霧のうなばら

社頭冬九月二十五日鴨社御法樂

深山には霰ふるらしとうたふ聲もこの頃なれや雪のかみがき

秋 夕同

日の影のうつろふ杜の夕かせに賀茂のかはなみ秋にすみけり

初冬月十月十五日石清水社御法樂

たちそめし冬のしるしに男やまひかりも冴えてまさる月かな

初冬風同月十九日鴨社御法樂

みづとりの鴨の青羽も冬や立つけしきになりぬ風のことゑかな

時雨過同

曇るかと思えにし雲もむら時雨とどまり難くはや過ぎにけり

十月見紅葉同月二十四日

月も日もしぐれのそらは冬ながら紅葉ばかりやいまも秋なる

山寒水欲氷同

ほかよりも名に似す冴ゆる山風に夏箕の川はいまもこほらむ

雖契不來戀同

かくばかりかけし契もあだ波の流れてのみやいつかよるべき

見 月十一月十一日神宮御法樂

五十鈴がはきよき流にかげとめて秋みる月はなほやすむらむ

松 霜同

天の下ときはかきはの神ごころ松にぞかかるしものしらゆふ

社頭祝言十二月十五日石清水社御法樂

千代よろづ動きなきよと宮ばしら立ててゆくへを祈る神がき

冬 山同月二十日鴨社御法樂

世をまもる常磐の木木のかみ山も冬には雪のゆふかけてけり

冬 鶴同

夜をさむみ霜はおけども松の葉のかはらぬ契ともづるのこゑ

● 絲 櫻 孝明天皇四日

絲ざくら春の手引の永き日もくりかへし花のながめ添へつつ
春 懐同

みな人のころも花の紐とけてへだてぬなかの春のさかづき
花映日同

咲く花に空もかすみて香に匂ふ日かげのどけき春べなりけり
惜花 孝明天皇四日

散らすもあれ花は幾春かはらねど今年見はやす我れを思はば
花如雲 同月七日

しらくもの春は空にも高からず見ゆるぞをちの花のさかりか
樹陰卯花 同月十五日

生ひしげり月さしいらぬ木のもとにまがふ光や咲ける卯の花
躑躅同

へだてなくうちまで照す岩つつじ花に火影もそむけてぞ見る

右一首は「ヤリみづのながめをそへてつつじさきつづく」といふ二十
字をわかつて、各初句の頭におきて、躑躅の歌二十首よめる中に「へ」の
字をおきてよませ給へる御製なり。

名所戀 同月二十八日

逢ふ事をわが松山のまつまにやただいたづらの波や越えける
春 山 四月十日

あさみどりかすみ春のはじめにて櫻につづくをちこちの山
新樹風 同月十四日

いづれぞと梅も櫻もわかぬまでしげるこずゑに風もこそ吹け
花落客稀 同月十九日

散りぬれば人の心の花のいろもよそにやうつる宿のさびしさ
松 同月二十三日

孝明天皇御製

よろづ木のあるが中にも顯れて松こそ千代のいろを見せけれ

冬 鳥 四月二十七日

おくれくる雁は雲井の雪をはらひ池のみづとり霜夜わびつつ

菖蒲露 五月五日

ひきのこしおのがままなる菖蒲にも五月の玉と露はおきけり

郭公過 孝明天皇紀

朝倉や木の丸どのにあらずとも名のりて過ぎよ山ほととぎす

夏 風 同月十二日

夏木立葉分さわぐと見るがうちにやがて吹きくる風の涼しさ

雲間郭公 同月十四日

一聲は雲の往來のひまもりておもはずも聞くほととぎすかな

路 螢 同月十五日

宮木をばはこぶゆく手に飛ぶ螢ひもゆふぐれの道てらしつつ

夏植物 同月二十日

薄く濃く木木も草葉もおしなべて茂るぞ夏のならひなりける

述懐 依人 孝明天皇紀

深き淵うすき水のいましめに日に我が身をかへりみつつも

鶯 六月一日

咲かねども匂ふばかりに梅の花こゑの色そへはるのうぐひす

紅葉 同月四日

わきて名に立田の山やいかならむ木木といふ木木紅葉してけり

春 日 同月十日

かすめるは春の習ひよしかはあれど四方にのどけき天津日の影

松上鶴 同月十一日

松風のこゑのしらべもあひやどる鶴や千歳をうれしげに鳴く

契 戀 同月十五日

孝明天皇御製